諫早市文化財調査報告書　第４集

林ノ辻遺跡

1983.3

諫早市教育委員会

序

人類が地球上にその足跡を残したのは，今から約 300万年ほど前に遡ると言われていますが，爾来人類は多くの発見をし，また発明をして生物界において確固たる地位を占めてきました。

火の発見，土器の発明，文字の使用，金属器の製作などありとあらゆるものは，人間の絶ゆまぬ努力と思考の産物であり，発展の礎となりました。

これら過去において生成された偉大なる遺産は，我々自身が体現しているものもあれば，あるいは地中深く埋もれた状態にあるものもあります。あるいはまた，この現象界から滅失してしまったものもあったでありましょう。

我々が今日存在する背景には，このような過去の偉大な遺産があったからに他ありません。換言すれば，我々の存在は我々がみずから創り出したものではなく，過去からの連続した線上における一つの点にしかすぎない，とも言えるでありましょう。そのことを過去の偉大な産物は我々に語りかけてくれます。また，我々が将来に向ってこの一本の線を維持・発展させていかなければならない中間点であることも自明の理であります。

このように考える時，我々は過去の偉大なる産物を後世に残し伝えることこそが，我々に課せられた使命であることを確認します。しかし，人類の歴史はまた，破壊の歴史でもあったと評価することができます。がしかし，我々は破壊の歴史の中に存在していても無為に破壊することだけは避けなければなりません。

以上のような考えのもとに，今回の発掘調査を実施したものであります。本報告が，今後の文化財保護行政及び学問の発展に寄与するところがあれば幸甚に存じます。

なお，発掘調査に際し，種々のご指導とご助言を賜わりました文化庁をはじめ，県教育委員会，関係機関，関係者及び炎天下のもと作業に従事していただいた皆様に対し，衷心より感謝の意を表するものであります。

昭和58年 3 月31日

諫早市教育長　西原　英麿

例　　言

1．本書は擁壁工事に伴う遺構の調査及び遺跡の範囲確認を目的として実施した林ノ辻遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は昭和57年度国庫及び県費補助を受けて実施した。

3．発掘調査は諫早市教育委員会が実施し，出土遺物は諫早市郷土館において保存，公開している。

4．本書の執筆者は次のとおりである。また挿図，図版等も各々担当者が作成した。Ⅴについては，長崎大学医学部解剖学第二教室の松下孝幸，分部哲秋両先生に玉稿を賜わりました。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ……秀島貞康

Ⅴ……松下孝幸，分部哲秋

5．遺構の実測・写真撮影は秀島，古賀佐徳が行い，遺物の実測・トレース・写真撮影は秀島が行った。また，出土人骨については松下，分部両先生によるものである。

6．本書に使用した高度値は海抜高である。また，方位は磁北を示している。

7．本書の編集は秀島が行った。

訂正及び補足

訂正

訂正	誤	正
挿図目次	第9図、第17図 …… 付図	…… 折り込み
24頁7行目	送葬	葬送
34頁1行目	Ⅳ	Ⅴ
38頁1行目	Ⅴ	Ⅵ
17行目	註4	註4'

補足

41頁14行下	註4下に 稲富裕和「富の原遺跡群確認調査概報 富の原常盤遺跡の調査」　大村市教育委員会　昭和57年 を挿入

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の地理的歴史的環境 …… 1
Ⅱ　発掘調査の経過 …… 5
　1．過去における調査等の事例 …… 5
　2．調査にいたる経緯 …… 9
　3．調査の概要 …… 11
Ⅲ　遺跡の概要 …… 13
Ⅳ　遺構 …… 17
　1．遺構の配置 …… 17
　2．遺構および遺物 …… 18
　・甕棺墓 …… 18
　・集石遺構 …… 19
　・祭祀遺構 …… 21
　・円形土壙 …… 25
　・箱式石棺墓 …… 26
　・円形土壙墓 …… 31
　3．その他の遺物 …… 33
Ⅴ　林ノ辻遺跡出土の中世人骨 …… 34
　1．はじめに …… 34
　2．資料および所見 …… 34
　3．総括 …… 36
Ⅵ　まとめ …… 38

挿　図　目　次

第1図　諫早市位置図（1/1,600,000） …… 1
第2図　遺跡分布図（1/40,000） …… 2
第3図　四時秋出土甕棺及び副葬土器実測図（1/3，1/6） …… 6
第4図　林ノ辻昭和56年度発見甕棺実測図（1/6） …… 7
第5図　小栗丘陵表面採集資料実測図（1/3） …… 8
第6図　林ノ辻遺跡地形図及び調査区設定図（1/600） …… 14
第7図　G－2・3土層図（1/30） …… 15
第8図　G－6土層図（1/20） …… 16
第9図　遺構配置図（1/150） …… 付図
第10図　甕棺出土状況図（1/20） …… 18
第11図　甕棺実測図（1/6） …… 18
第12図　集石遺構出土遺物実測図（1/3） …… 19
第13図　集石遺構実測図（1/30） …… 20
第14図　祭祀遺構土層図（1/30） …… 21
第15図　祭祀遺構出土遺物実測図その1（1/3） …… 22

第16図　祭祀遺構出土遺物実測図その２（1/2）…… 23
第17図　祭祀遺構実測図（1/30）…… 付図
第18図　円形土壙実測図（1/20）…… 24
第19図　円形土壙出土遺物実測図（1/3）…… 25
第20図　１号箱式石棺墓実測図（1/30）…… 折り込み
第21図　１号箱式石棺墓墓壙実測図（1/30）…… 折り込み
第22図　２号箱式石棺墓実測図（1/30）…… 27
第23図　２号箱式石棺墓墓壙実測図（1/30）…… 28
第24図　３号箱式石棺墓実測図（1/30）…… 29
第25図　箱式石棺墓出土遺物実測図（1/2）…… 30
第26図　１号円形土壙墓実測図（1/20）…… 31
第27図　２号円形土壙墓実測図（1/20）…… 32
第28図　３号円形土壙墓実測図（1/10）…… 32
第29図　２号円形土壙墓出土遺物実測図（1/2）…… 33
第30図　その他の遺物（1/2）…… 33
第31図　本明石棺群第１号石棺墓（1/30）…… 40
第32図　本明石棺群出土遺物実測図（1/3）…… 40

図　版　目　次

１－１　遺跡遠景(東より)
　　２　調査風景
　　３　Ｇ１土層(北より)
２－１　Ｇ２土層(北より)
　　２　Ｇ３土層(北より)
　　３　Ｇ６土層(西より)
３－１　甕棺墓出土状況(北より)
　　２　甕棺墓墓壙(北より)
　　３　集石遺構(東より)
４－１　祭祀遺構遺物出土状況(南より)
　　２　掘り上げ後の土壙の状態(北より)
　　３　円形土壙(東より)
５－１　１号箱式石棺墓(東より)
　　２　蓋石除去後(北より)
　　３　墓壙(左上は1号円形土壙墓)(東より)
６－１　２号箱式石棺墓(東より)
　　２　蓋石除去後(東より)
　　３　墓壙(東より)
７－１　３号箱式石棺墓(北より)
　　２　小口部の状態(北より)
８－１　１号円形土壙墓(西より)
　　２　２号円形土壙墓(東より)
　　３　３号円形土壙墓頭蓋出土状態(南より)
　　９　出土遺物（昭和55年発見甕棺，甕棺箱式石棺墓出土遺物，銭貨，青磁，円形土壙墓出土土師質土器）
　　10　出土遺物（四時秋出土甕棺，１号人骨）

表　目　次

第１表　遺跡地名表 …… 3
第２表　遺構一覧表 …… 17
第３表　土師質土器法量表 …… 33
第４表　下顎骨計測値 …… 35

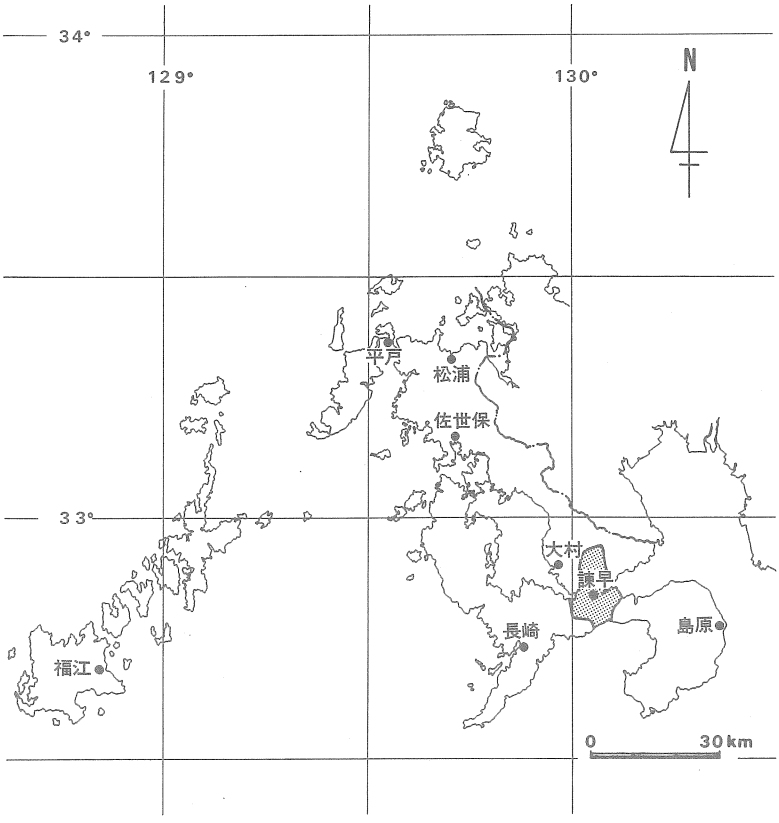
I　遺跡の地理的歴史的環境

○遺跡の地理的環境

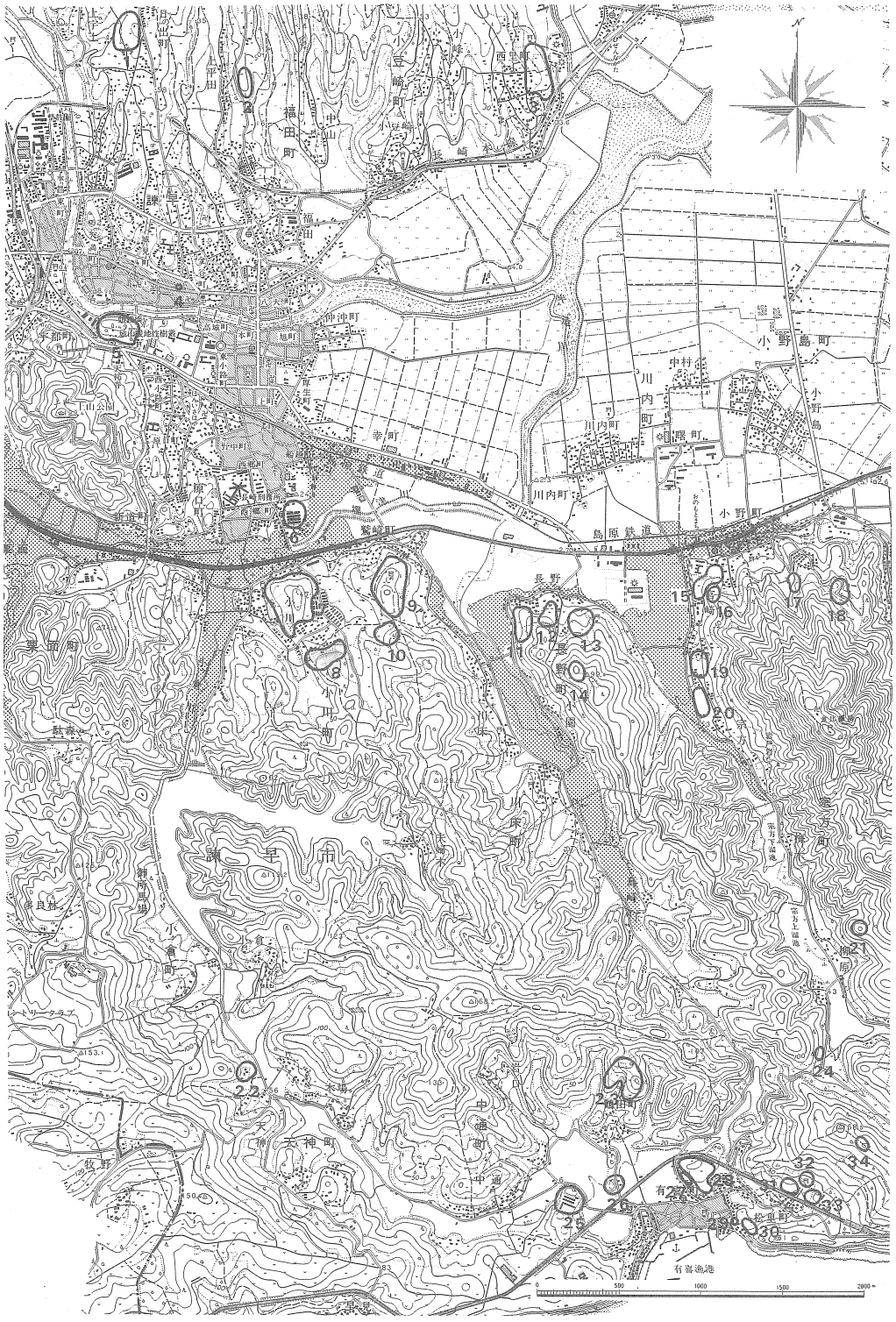
諫早市は長崎県のほぼ中央に位置し，秀峰多良岳を境に佐賀県と接する。標高1,075mの経ヶ岳を主峰に，多良岳，五家原岳，帆柱岳，峰火山の群小火山が寄生し，その地形は複雑である。また浸蝕の度合も高く，深い谷を形成しており丁度掌を拡げたような恰好を見せる。この深く切れ込んだ谷奥に源を発する河川のうち，最も大きいものが本明川である。全長22kmと短かく流底の傾斜が急峻であるため扇状地を形成することなく有明海へ流入している。河口部は潟土が厚く堆積し，古くから干拓が開始され，県下随一の穀倉地帯を形成するに至った。

本明川以北の表層地質は，第三紀から第四紀にかけて噴出した多良岳の安山岩が標高 500m前後まで被覆しており，富川町，湯野尾町，御手水町などの高所においてその露頭を観察することができる。以下は凝灰角礫岩よりなる火山砕屑岩層や泥流堆積物が被覆し，地元ではドンク盤と呼称する弁別容易な層である。

以南は，干拓地を挟んで相似た様相を見せている。しかし，本遺跡以西には砂岩等を基盤岩類とする第三紀層から成っており，趣を異にしている。栗面，小川，長野，宗方，小野など北面する丘陵先端部は凝灰角礫岩の被覆が認められ，以南には安山岩の被覆があり，千々石湾へ没している。これらは八天岳，金比羅岳，蓮華石岳，獅子喰岳などによる生成と



第１図　諫早市位置図(1/1,600,000)



第２図　遺跡分布図(1/40,000)

第1表　遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	出土遺物等	時期
1	折山頭	諫早市日の出町折山頭	標高60m　丘陵上平坦部		
2	窪ン谷	〃　福田町上平田	〃　50m	剝片他	
3	西里	〃　西里町	〃　20m　丘陵先端部	縄文式土器，弥生式土器剝片他	縄文～弥生
4	金谷	〃　金谷町	〃　18m	織部燈籠	近世
5	高城々址	〃　高城町	〃　50m　独立丘陵	本丸，空濠，土塁他	中世
6	諫早農高	〃　船越町	〃　10m	細形銅剣，弥生式土器	弥生
7	**林ノ辻**	**〃　小川町**	**〃　40m　丘陵全域**	**弥生式土器，箱式石棺，甕棺，中世墓，青磁他**	**弥生～古墳～中世**
8	〃	〃	〃　40m　〃	弥生式土器他	弥生
9	十仙平	〃　鷲崎町	〃　40m　丘陵頂部	剝片他	縄文
10	源内谷	〃　小川町	〃　30m　丘陵鞍部	剝片，砕片他	〃
11	崎田	〃　長野町	〃　25m　丘陵先端部	弥生式土器，剝片他	弥生
12	大久保	〃	〃　30m　丘陵斜面	剝片，砕片	縄文
13	水葉山	〃	〃　20m　〃		〃
14	長野城址	〃	〃　100m　山頂		中世
15	宮崎館	〃　宗方町	〃　20m　丘陵先端部	ナイフ形石器，石鏃，弥生式土器，土師器，青磁他	旧石器～中世
16	小野城址	〃　小野町	〃　40m　丘陵頂部	本丸，空濠，六地蔵石幢他	中世～近世
17	小野貝塚	〃	〃　40m　丘陵先端部	弥生式土器，ウミニナ，ハイガイ他	弥生
18	内野	〃	〃　60m　〃	弥生式土器，石鏃他	〃
19	水の手	〃　宗方町	〃　10m　丘陵		古墳
20	太郎丸	〃	〃　10m　水田部	弥生式土器	弥生
21	宗方城址	〃	〃　100m　丘陵頂部		中世
22	堤の端	〃　天神町	〃　60m　丘陵	石刃，剝片，砕片	縄文
23	鶴田城	〃　鶴田町	〃　80m　丘陵頂部		中世
24	木秀古墳	〃　長野町	〃　70m　丘陵	横穴式石室2基，須恵器他	古墳
25	宇木城	〃　有喜町	〃　30m　丘陵先端部		中世
26	〃（二の丸）	〃	〃　10m		〃
27	上原貝塚	〃　松里町	〃　10m　丘陵斜面	弥生式土器，土師器，鉄鏃，獣骨片他	弥生～古墳
28	上原	〃	〃　30m　丘陵上平坦部	弥生式土器，剝片他	弥生
29	有喜貝塚	〃	〃　20m　丘陵先端部	縄文式土器，弥生式土器，箱式石棺他	縄文～弥生
30	六本松	〃	〃　30m　丘陵斜面	弥生式土器，石鏃，剝片他	〃
31	平の上	〃	〃　40m　丘陵	剝片，砕片他	縄文
32	熊野神社	〃	〃　40m　丘陵上	宝篋印塔，五輪塔他	中世～近世
33	有喜大久保	〃	〃　40m　丘陵	剝片他	縄文
34	小烏帽子古墳	〃	〃　140m　丘陵頂部		古墳

考えられる。

近年，調査遺跡の逓増により，火山灰の存在も明らかになりつつあるが，テフロクロノロジーを確立するまでには至っていない現状であり，火山学，地質学などと共にその進展が望まれるところである。

○遺跡の歴史的環境

諫早は県下随一の穀倉地を有している。これは干拓によるものと，それ以前の潟土の陸化作用―海水面低下も関連―によるもので，陸化作用は年平均10cmほどの上昇率を示すとされる。[註1] 陸化作用により丘陵沿いの耕地が成立するのは弥生期以前に遡ると考えられる。即ち前期末頃からの本遺跡の成立，本遺跡と対峙する諫早農業高等学校遺跡[註2]（古く破壊されたが多数の甕棺墓の発見があり，細形銅剣の検出があったと伝えられる。）の存在。埋津川を挟んで対峙する両遺跡の成立背景には稲作農耕という経済基盤の確立が想定される。

そこでどれ位の干潟が当時存在したであろうか。水田部位での調査実例が無いため不明であるが，他遺跡を参考にすると，大村扇状地末端の富の原常盤遺跡[註3]（中期末頃）約５ｍ，長崎市深堀遺跡[註4]（前期末～）約４ｍ，佐世保市宮の本遺跡[註5]（中期前半～）３～４ｍ，西彼外海町出津遺跡[註6]（前期後半～）３～５ｍ，有川町浜郷遺跡[註7]（前期後半～）４～５ｍ，宇久町松原遺跡[註8]（前期後半～）３～４ｍを各々測る。地域にバラツキはあるが前期～中期にかけては３ｍ前後に営まれている。よって３ｍ以下に当時の海水面が予想される。また和島誠一氏ら[註9]によれば前期3.5ｍ以下，中・後期２ｍ以下の海水面を有明海周縁の遺跡を基に想定されており，上記と大略一致する。そこで地形図に５ｍより上に位置する水田の範囲を入れると第２図（アミ部分）のようになる。 3.5ｍの水田面は更に拡大する。第２図６，７より西側には湿田的な可耕地が広く展開していたのである。この可耕地が本遺跡及び農校遺跡成立の基盤であったことが想定される。

『肥前国風土記』には「高来郡　郷玖所里廿　駅肆所　烽伍所」と記し，『延喜式』兵部省式に船越の駅名が見える。また『倭名類聚抄』には「新居爾比井」と記し，西郷町に比する説[註10]もある。このように古代より交通の要衝として果した役割は大なるものがある。

註

1　土肥利男『多良山麓』昭和40年
2　正林　護「諫早市出土の銅剣」『九州考古学』41～44　昭和46年
3　稲富裕和『富の原遺跡確認調査概報』大村市教育委員会　昭和57年
4　内藤芳篤他『深堀遺跡』長崎大学医学部解剖学第二教室　昭和42年
5　久村貞男他『宮の本遺跡』佐世保市教育委員会　昭和56年
6　平野敏和『出津遺跡』外海町教育委員会　昭和57年
7　小田富士雄『五島列島の弥生文化―総説篇』長崎大学医学部解剖学第二教室　昭和45年
8　〃　〃
9　和島誠一，麻生優、田中義昭「北九州における後氷期の海進海退について」『資源科学研究所彙報』63　昭和42年
10　瀬野精一郎『長崎県の歴史』昭和47年

II　発掘調査の経過

1．過去における調査等の事例

林ノ辻遺跡の存在は素焼のカメが出土する場所としてかなり古くから地元では認識されていたと聞くが，我々が管見において知るのは昭和48年橋本幸男氏[註1]の論考を初出とする。

氏は当時諫早市周辺の遺跡群を丹念に調査されており，その調査時に当遺跡を発見された。宅地造成が進む丘陵先端部において合口甕棺２基を発見され，昭和43年丘陵西側の字四時秋（しじあき）甕棺出土地点と連続した遺跡であろうとされた。また時期は出土甕棺から弥生時代中期後半～後期を中心とするものと推考された。

この甕棺発見を契機として昭和44年県教育委員会により発掘調査がなされている。宅地開発に伴う事前調査として実施されたもので甕棺掘り方及び甕棺片など多くの遺物が検出されている。時期は弥生時代中期前半～中葉の「須玖式」と呼ばれる土器群を中心とする[註2]。

このようにして林ノ辻遺跡がかなり広範な遺跡であり，かつ長期に及ぶものであろうことが次第と明確になってきたのである。そして，字四時秋を小栗遺跡Ａ地点，また丘陵先端部を小栗遺跡Ｂ地点として周知の遺跡としての把握がなされた。

ところが，蚕食状況のもとで一歩一歩と進んでいた宅地開発及び造成工事の結果，字林ノ辻において新たに甕棺が発見され，この遺跡が丘陵全域を包み込む規模であることが再認識されたのである。昭和55年５月のことであった。

更に，従来よりこの遺跡の踏査を実施され，丹念に遺物の採集をされていた市内在住の古賀力，稲田三千年両氏の資料の中には，今次の調査において検出したものよりも古く遡るものも見られた。

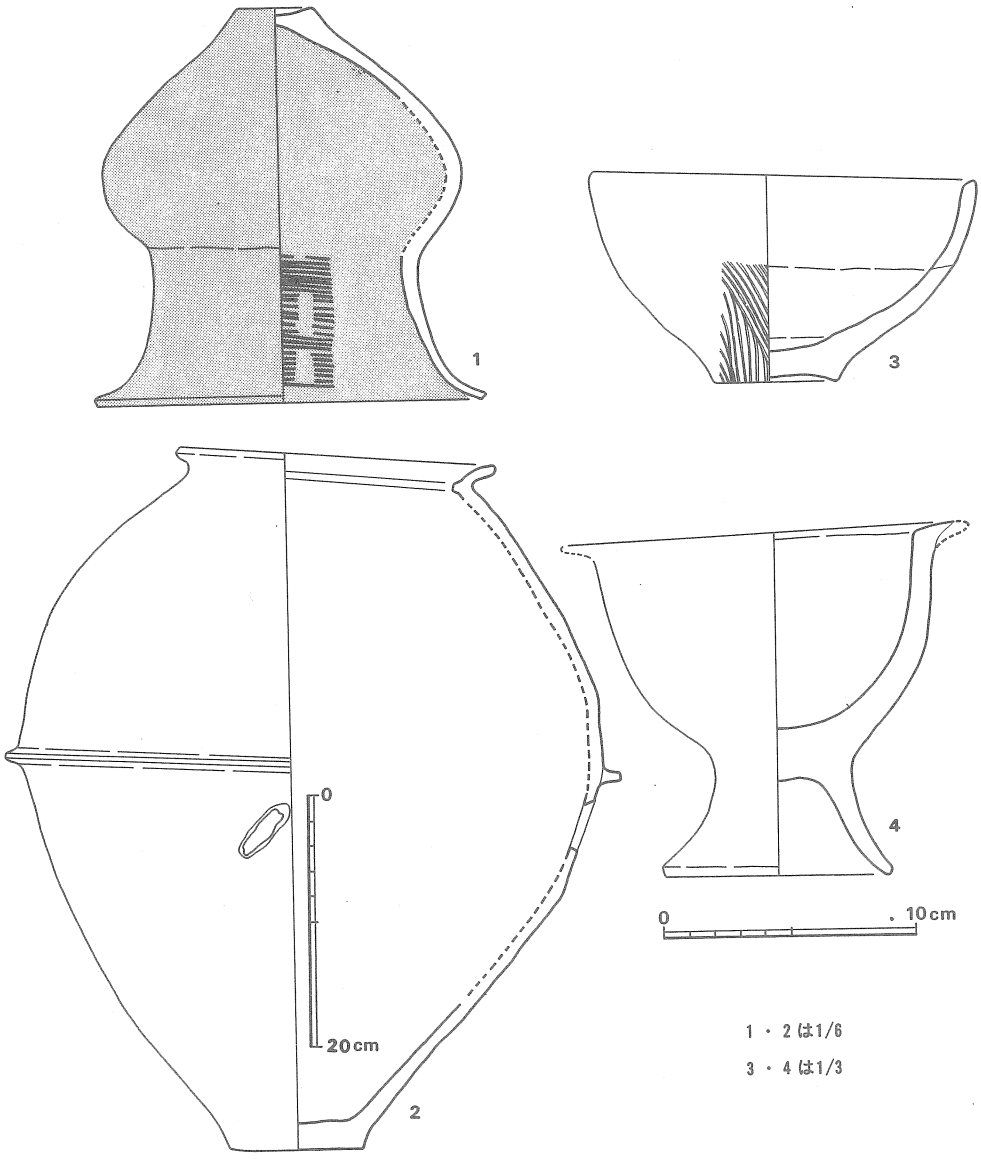
以上，過去における調査等の事例の概略を述べたが，次にその遺物の若干を紹介する。

●小栗遺跡Ａ地点（字四時秋）出土資料[註3]（第３図，図版10）

昭和43年畑の耕作中に発見されたもので，合わせ口にした甕棺１基と副葬された土器２個のセットからなる。

１は上甕として使用された丹塗りの壺形土器である。口縁外径30cm，胴部最大径28.4cm，底径６cm，器高31.4cmを測る。算盤玉形の器体に大きく外反する広口がつく。底部は上げ底をなす。胴最大径は中位よりやや下位。口唇部は僅かに凹む。口縁内面はハケのちナデを施し，他の部位は全てナデ仕上げののち，丹塗りを施す。胎土中に１～２mm大の砂粒を含み，焼成はややあまい。２は下甕に使われた甕形土器で，截頭卵形の器体に逆Ｌ字形の口縁部がつく。口縁部は内側へ突出し，上面は湾曲し，端部は丸くおさめる。胴中位には断面コ字形突帯を一条めぐらし，直下に一ヶ所穿孔している。色調は内外面共に淡茶褐色を呈し，胎土中に１～３mmの

砂粒を含む。焼成はややあまい。口縁外径26～24.8cmと歪んでおり，胴部最大径はほぼ中位にあり49cmを測る。底径10.6cm，器高56cmを測る。調整は内外面共にナデ仕上げ。3･4は副葬された状態で検出された。3は鉢形土器で，碗形の器体に上げ底気味の底部がつく。内面ナデ，外面上半部ナデ，下半部ハケ，底面ナデで仕上げる。中位に輪積み痕を残す。色調は内外面共に淡茶褐色を呈し，底部近くに焼成時の黒斑がある。胎土は1～2mmの砂粒を含むが精良で焼成は良好。口縁外径15.3



第3図　四時秋出土甕棺および副葬土器実測図

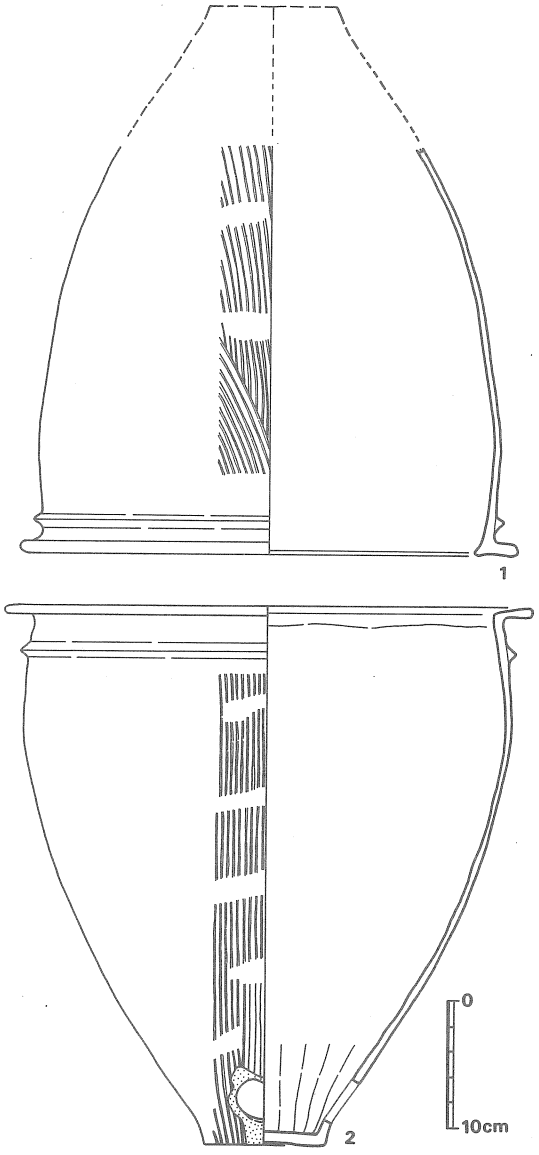
～14.2cmと歪む。底径 4.9cm，器高8.3cmを測る。4はく字形に外反する平坦口縁の碗形器体に脚台がつく台付鉢形土器である。全体的に厚ぼったい感じを与える。口唇部と脚端部を欠損。調整は体部・脚台部内面ナデ仕上げ。外面は器表が荒れており不明。色調は茶褐色を呈し焼成時の黒斑を認める。胎土は1～2mmの砂粒を含む。焼成良好。時期は弥生時代中期中葉～後半。

●字林ノ辻出土資料[註4]（第4図，図版9）

土取りにより破壊されており，掘り方は短径50cm，長径1mていどの楕円形墓壙である。掘り方は浅く，西側残存部が若干下位にあり下甕位であろうと推定される。主軸はほぼ東－西位である。

上・下甕共に甕形土器を合わせ口に使ったものと思われる。1は上甕と思われ底部付近を含めて1／2強を欠失。T字形口縁に張りの少ない胴部がつく。口縁部は内側にやゝ突出させ丸くおさめる。上面は凹むが中ぶくらみが見られ，口縁直下に断面三角形突帯を一条めぐらす。器壁は薄くほぼ均一にしている。内面及び口縁部から突帯まではナデ，外面以下はハケ仕上げ。色調は内面乳灰色，外面茶褐色を呈し，煤の付着が一部認められる。日用品を転用したもの。胎土は精良，焼成は良好。復元口縁外径38.8cmを測る。

2は逆L字形口縁をなす。口縁下に断面三角形突帯を一条めぐらす。胴部はわずかに張りをもち，上げ底気味の平底へつづく。器壁は薄く均一にする。内面ナデ，内面底部付近はユビで下から上へナデつけて調整。口縁部から突帯までナデ，突帯直下はハケのちナデ，以下はハケにより仕上げる。底部付近に径約3cmの孔を内側から外側に穿つ。色調は内面淡茶色，下半部に炭化物様のものが付着。外面茶褐色，上半部に煤の付着が顕著である。胎土は精良。焼成良好。口縁外径41.4cm，

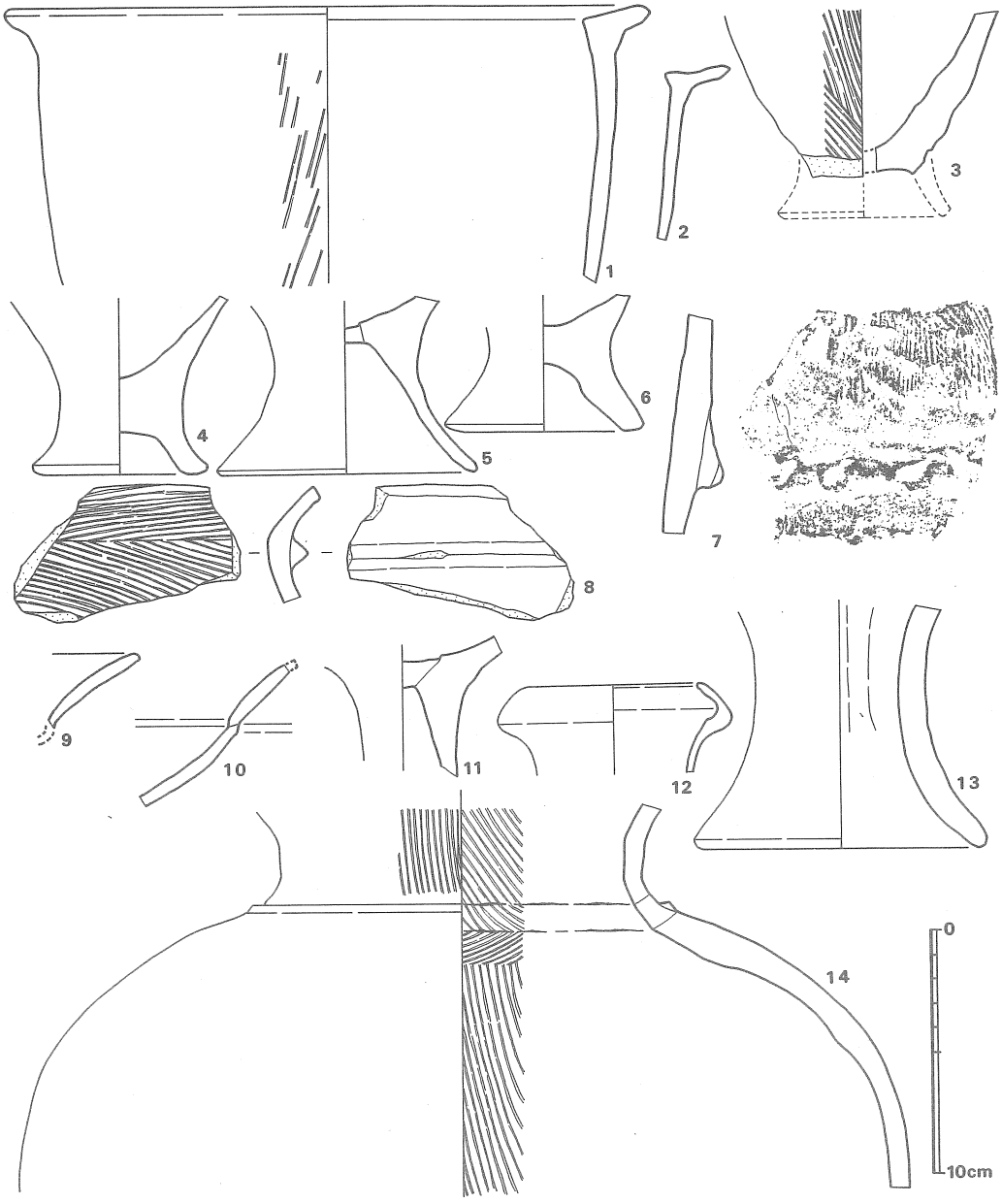


第4図　林ノ辻　S.56年度発見甕棺(1/6)

底径 9.6cm，器高42.3cmを測る。中期中葉の所産である。

●小栗丘陵表面採集資料[註4]（第５図）

14点を図示したが，これらは古賀力，稲田三千年両氏及び市教委保管分のうちの一部である。１～８は甕形土器及び底部である。１は逆Ｌ字形口縁をなし胴はあまり張らない。内面はナデ，外面はハケのちナデ仕上げ。口縁外径26.4cmを測る。２も逆Ｌ字形口縁をなし内側に少し突出



第５図　小栗丘陵表面採集資料実測図(1/3)

させる。上面は中凹みを呈す。3は底部付近で脚台接合面で剝離している。7は胴上半部の破片で肥厚させ斜位の刻目を施す。貼付肥厚部のみにナデを施し，外面タテハケ，内面タテ，ヨコ，斜位のハケ仕上げ。8はく字形に外反する口縁部で直下に断面三角形突帯を貼付。内面ハケのちナデ，外面ナデ仕上げ。4～6は脚台部で5は薄手で脚端部は尖がり気味におさめる。器体底部は充塡している。4・6は5に比し低くて厚手のものである。9～11は高坏形土器で9・10は同一個体片と思われる。内湾する体部から反転して外湾する口縁部を有するもので，端部はわずかに平坦面を残す。精選された粘土を用いており，調整は器表が荒れているため不明。11は脚柱部で器体底部は粘土を充塡している。精選された粘土を使用している。調整は不明。12・14は壺形土器である。12は袋状口縁をなすもので口径 6.8cmを測る。胎土は精良，焼成良好。器表が荒れているため調整不明。14は肩部に断面三角形突帯を貼付しており，内面には粘土の継ぎ目が看取される。内面は下から上に順次ハケ調整を施す。外面は口縁下位はハケ，突帯部ナデを施すが以下は器表が荒れているため不明である。

1・2・4・6・12～14は中期中葉～後半，8は後期，9・10は後期後半～終末，7は前期後半に比定できよう。これらはすべて表採資料であるが，本遺跡の存続期間を或る程度推測させるに足るものである。

註1　橋本幸男「長崎県諫早市周辺の遺跡」『長崎県立美術博物館　研究紀要』1　1973
註2　長崎県文化課　正林護氏のご教示による。
註3　長崎大学医学部に保管されていたが，昭和57年諫早市郷土館に保管替えを行った。内藤芳篤先生のご配慮に感謝するものである。
註4　現在諫早市郷土館において保管している。古賀，稲田両氏のご配慮に感謝するものである。

2．調査にいたる経緯

昭和43年発見された本遺跡は，その後昭和44年県教育委員会の発掘を経て，周知の遺跡として認識されていたのであるが，その範囲が地点として限定されていたため，その後の宅地開発等によって若干破壊され蚕食状況となっていたのは容易に想像できよう。

このような状況下のもと，昭和55年に甕棺が新たに発見されるに及び，遺跡の範囲もしくは埋蔵文化財包蔵地の範囲の把握が表面採集できる地点から，地形・地質等を勘案した範囲すなわち面としての把握へ移行していったのは当然の帰結といえよう。

このような変化をもたらした昭和55年林ノ辻の甕棺の発見は実に意義深いものであった。

さて，甕棺発見の報を受けて現地に赴いてみると，近傍の造成法面に更に多くの遺構を確認することができた。甕棺発見地点より北東約50mの地点であった。法面には二基の箱式石棺，甕棺の掘り方かと思われる土壙，平坦な床面をもつ住居址と思われる遺構などが確認された。中には造成後幾星霜も経ており霜くずれで消滅したものもあったろうと推される。

翌昭和57年6月に至り，土地所有者より法面保護の擁壁工事を行いたい旨の連絡があり，それを受けて崩壊寸前の遺構群の緊急調査を実施する予定をたてたのである。また同人による宅

地開発の許可申請書が提出され，設計変更等による現状の保存について協議を実施したが，技術的な面など諸種の事情により変更不能であり，遺構及び遺跡の範囲確認をも含めて，昭和57年度事業として実施することとなったのである。

調査関係者は次のとおりである。

調査総括　西原　英麿　諫早市教育委員会教育長
　　山口　隆昭　〃　教育次長
　　松尾　　誠　〃　社会教育課長
　　山口　勝実　〃　課長補佐
　　鶴田　　勲　〃　指導係長
　　木原　保夫　〃　事務職員
　　平古場　豊　〃　〃
　　草野マスエ　〃　〃（庶務担当）
調査担当　秀島　貞康　〃　〃
調査協力　古賀　佐徳
　　松下　孝幸　長崎大学医学部解剖学第二教室
　　分部　哲秋　〃
調査外業　國武勇，芦塚進，酒井勇，津田諭，竹市時義，吉田秀男，東安晴，古賀直磨，塚元尚，宮田浩二，草野宏士，草野孝士，中村義孝
整理作業　松竹文子，中山菊枝

発掘調査，遺物整理に際しては下記の方々及び機関にご指導，ご助言を頂いた。ご芳名を記し深甚の謝意を表する次第である。（敬称略，五十音順）

麻生優，池田勝，諫早市郷土館（野中素，吉田碩男，山口玲子），稲田三千年，稲富裕和，小栗公民館（宮崎和十，佐藤弘，佐山政勝，小北弘子），小栗小学校　神尾ミヨ，古賀力，下川達彌，城臺太郎，正林護，田川肇，立平進，宅島寿雄，塚元五十二，鳥越辰興，内藤芳篤，長崎県文化課，長崎県立美術博物館，長崎大学医学部解剖学第二教室，平野敏和，前田隆志，松山芳雄，宮崎貴夫，村井正明，村川逸朗

３．調査の概要

調査は崩壊寸前の遺構群の取り上げ調査，及び遺構確認，遺跡の範囲確認のためのトレンチ調査を実施した。

前者はトレンチ４ケ所（Ｔ－１～４）を設定し，状況により若干の拡張を行うこととした。また後者は対象面積が約 3,800㎡と広大なため数多く設定する必要が認められたがトレンチ７ケ所（Ｇ－１～７）を設定する余力しかなく，全体の２％程度にとどまった。しかし最下段に土砂崩壊防止のための既掘の側溝があり，これをもって土層の状態，包含層の有無を知ることができた。

以下，日誌をもとにその概要を述べる。

・７月12日～19日

７月12日に現場入りし，器材の搬入，休憩用テントの設営を行う。同時に現況写真の撮影。除草を開始するが竹が繁っており進捗せず。地形にあわせて20ｍ間隔で基準杭の杭打ちを行う。南北の主軸はＮ－15°5′－Ｗである。法面が３～５ｍほど切り立っているため滑落防止用のパイプを組み立てる。Ｔ－１，Ｇ－１を設定。Ｇ－１は包含層が残っていないことが判明する。

・７月21日～31日

Ｇ－２～６を設定。その結果，Ｇ－２・３にも包含層が存在せず，また遺構・遺物の検出もなかった。Ｇ－４において褐色土精査中に径20cmほどのピットと人骨の頭蓋を検出する。周辺を丹念に調査するも墓壙らしきものなし。Ｇ－５では褐色土層下位において拳大の安山岩礫集石を検出・礫中に弥生中期の土器が挾在する。北縁部のみを確認するにとどめる。Ｇ－６では表土の下に褐色土があり，その下位に黒色土を確認する。旧表土かと思われたが火山灰の可能性もある。この層を掘り込んだ土壙二基を確認。中一基からは多数の弥生式土器を出土。性格不明土壙。Ｔ－１において円形土壙墓（１号）一基検出。人骨片が存在。これに切られた形で箱式石棺（１号）を検出。東側にも法面に現われた箱式石棺（２号）を確認。23日より豪雨に見舞われ，翌24日に長崎の水害による大惨事の報を受く。諫早の大水害から丁度25年目であった。１号円形土壙墓，１号箱式石棺墓の写撮・実測開始。Ｔ－２設定。造成により切り取られ約半分残存する円形土壙墓（２号）検出。歯が断面にひっかかるようにして残っている。Ｔ－３設定。

・８月２日～12日

１号箱式石棺の実測継続。堅牢に構築されており赤色粘土の目張りもしっかりしている。掘り方の精査を始める。西側の高い方は二段，東側の低い方は一段である。棺内精査を行いガラス玉１と鉄鉇1を検出。床面は丁寧な敷石をする。２日に人骨調査，取り上げを長崎大学医学部解剖学第二教室の内藤芳篤先生にお願いをする。３日と５日の両日松下，分部両先生来跡。２号箱式石棺墓の写撮後，実測開始。蓋石はヨロイのように片方を重ね合わせる蓋せ方をしている。また床面には玉石を敷いて棺床面としている点など，１号との差異が認められる。敷石

上において鉄鉋を検出。また頭位の小口石には朱を塗った痕跡を認める。１号石棺とは種々の点において相違が認められたが，主軸方向が 90° 振れている事実には驚く。Ｔ－３の表土剝ぎを開始する。表土下においてプランの検出を行うが土層の状態が悪く判然としない。法面において床面が確認されるので立ち上がりを追って調査する方法をとる。その結果，プラン確認のため拡張を行ったトレンチよりも更に大きな土壙であることが判明。現在の石垣の下の方に拡がると想像されるため，排土部と通路を残して拡張を断念。今回はこの大土壙の北縁を検出したのみであり，どのようなプランを呈するか不明である。トレンチ南端において立ち上がりの一部が確認されたので，長楕円形を呈するものか。中からは弥生式土器片が出土する。Ｇ－７を設定して包含層の有無を調査。褐色土包含層が存在し弥生式土器が出土。包含層の北端がより以北あることが判明。Ｔ－４を設定し，半截された甕棺の取り上げ調査を行う。棺は東側に口縁部を向けており，昭和55年発見のものと同方向である。掘り方底面に溝があり，溝の少し上方に石が存在。木蓋であったであろうことを示している。この付近に甕棺の１グループがあろうと推量される。２～４日まで地形測量を行う。

・８月13日～16日

盆休み

・８月17日～31日

１号・２号箱式石棺実測完了。引き続きＴ－１南端の箱式石棺（３号）の精査に入る。上位の集石実測後，棺内の調査を行う。精査するも遺物・棺材の出土は認められず棺床面へ。一部に玉石を敷いた棺床を確認。敷石を取り除き下位の精査。溝状の掘り方があり，側壁用のものと思われる。棺材は抜き取られたものと判明。Ｔ－３の不明土壙の精査。拳大の安山岩礫が弥生土器片と共に多量に出土するため，平面図と断面図の作製に取りかかる。実測後土器を取り上げるが再び礫が多量に出土。都合２回の実測を行う。礫中に大石が３個存在し注目される。Ｇ－５の集石実測及びＧ－1 ～３・５・６の土層断面図作製

・９月１日～20日

３号箱式石棺実測完了。Ｔ－３の不明土壙へ主力を傾ける。実測から取り上げを繰り返して床面へ。床面直上には白灰色の粘性の強い土層があり，層中に土器片，礫，炭化物を包含している。この層は床面全体に広がっている。この層を取り除いて床面となるが，床面は黄～赤褐色を呈するガチガチの床面である。厚さは約１cmほどで硬い。土層中の鉄分とマンガン分の酸化沈積物かと推量される。この床面は平坦ではなく，幾つかの凹部が認められる。６ケ所ほどあり円形，楕円形，溝状の形態をなしている。この６ケ所程の小土壙の床断面は多く舟底状で明確な立ち上がりをもたない。また２ケ所にはほぼ中央部の上位に大きな二抱え位の石を据えており偶然の所産とは思われない。Ｔ－３の実測・写撮を行い，今回の調査を終了する。

以上，日誌をもとに調査の概略を述べた。実働日数50日，稼動人員延べ267人，調査面積約140 ㎡である。

III　遺跡の概要

林ノ辻遺跡は北へ延びる丘陵の東側斜面に位置し，標高25～40ｍを測る。傾斜角は14度ほどでかなりの勾配である（第６図）。そのため畑地として利用する際，段切りを行い，石垣を築いている。

調査では傾斜に沿って20ｍ間隔の基準杭を打ち，南北をＺ～Ｅ，東西を１～３と標示した。この交点及び線上に７本のトレンチを設定，また任意に４本のトレンチを設定した。以下，各トレンチの概略を述べる。

Ｇ－1（図版１）　約10cmの表土下は部分的に茶褐色土が認められる。この層には安山岩の風化礫を混じえるため下層との再堆積土又は漸移層と推される。その下位に地元でドンク盤といわれる層で拳大～人頭大の安山岩風化礫層がある。風化礫や周囲には黒褐色の斑点があり鉄分やマンガン分の酸化沈積物と思われる。色調は淡茶色，赤紫色，灰色，黄色の風化礫層が混じる。粘性は全くなくスコップで削るとザクザクとした感じである。無遺物層。このトレンチからは表土を含めて一片の遺物も出土せず。

Ｇ－2（第７図，図版２）　Ｇ－１と相似た層序を示している。

１……淡黒褐色土　表土

２……茶褐色土　　指頭大の安山岩風化礫及び炭化物を含む。弱粘性。漸移層又は再堆層。

３……黄褐色土　　指頭～拳～人頭大の安山岩風化礫層。砂質を示す。

このトレンチからも遺物の出土なし。

Ｇ－3（第７図，図版２）　Ｇ－２とほぼ同様の層序を示す。３・４の相違は内容物と粘性の違いにあり，元来は同層として取り扱って良いものと推される。表土下よりの遺物の出土は皆無である。

以上Ｇ－１～３には元来の包含層であろうと推される土層が存在しない。類似の土層は指摘できるが風化礫の混入があり，漸移層もしくは再堆積層と思われ無遺物層である。

Ｇ－4　表土下には粒子の細かい茶褐色土があり下位に淡黒褐色土が存在する。この層は後述のＧ－６，３層に類似。この下層から頭蓋とピット群を検出。

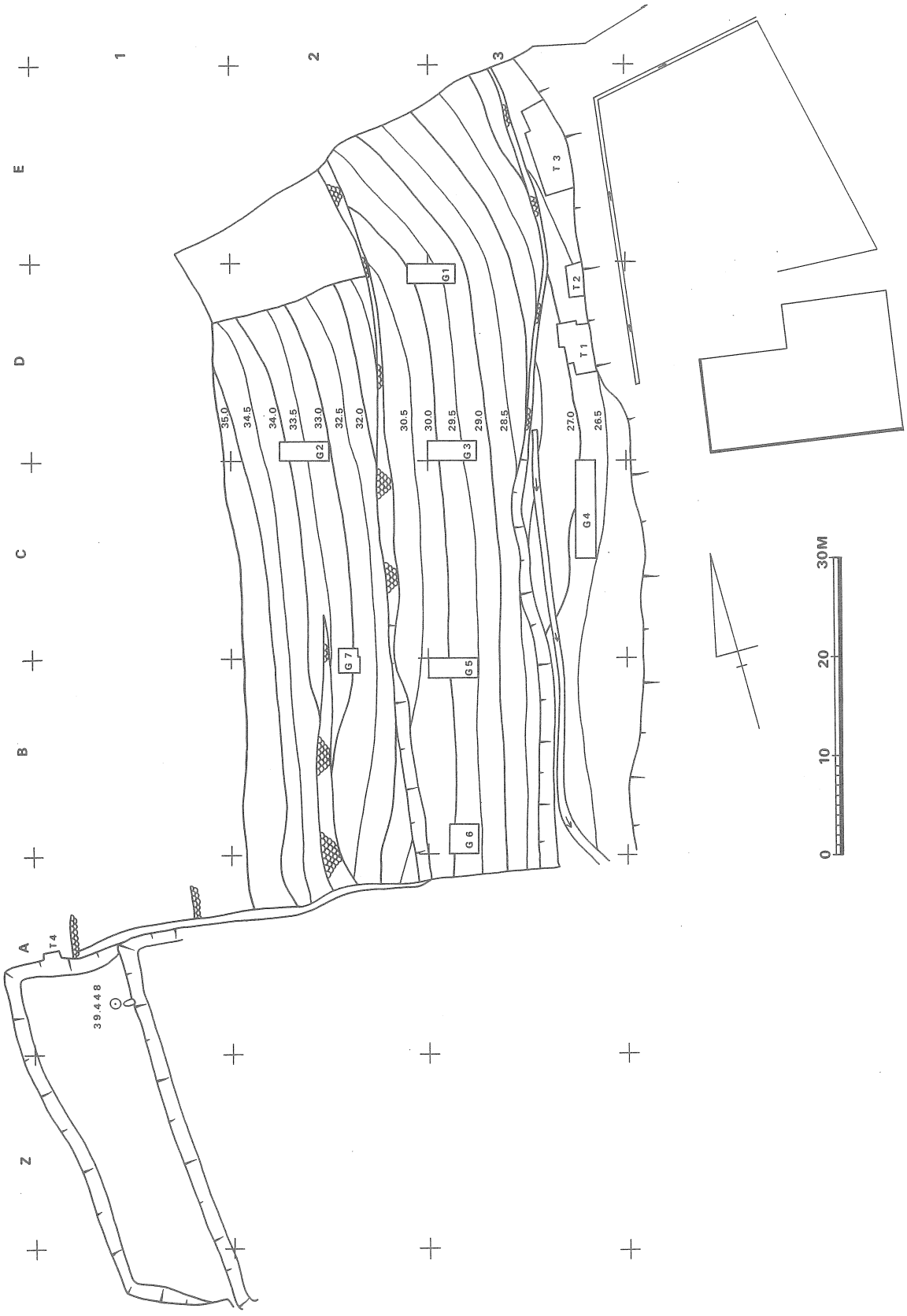
Ｇ－5　表土下にはＧ－２，２層と同様の層が存在。その下から集石が検出された。この２層は，よって弥生中期以降の高位からの再堆積土と推量される。

Ｇ－6（第８図，図版２）　最も厚い堆積状態を示している。

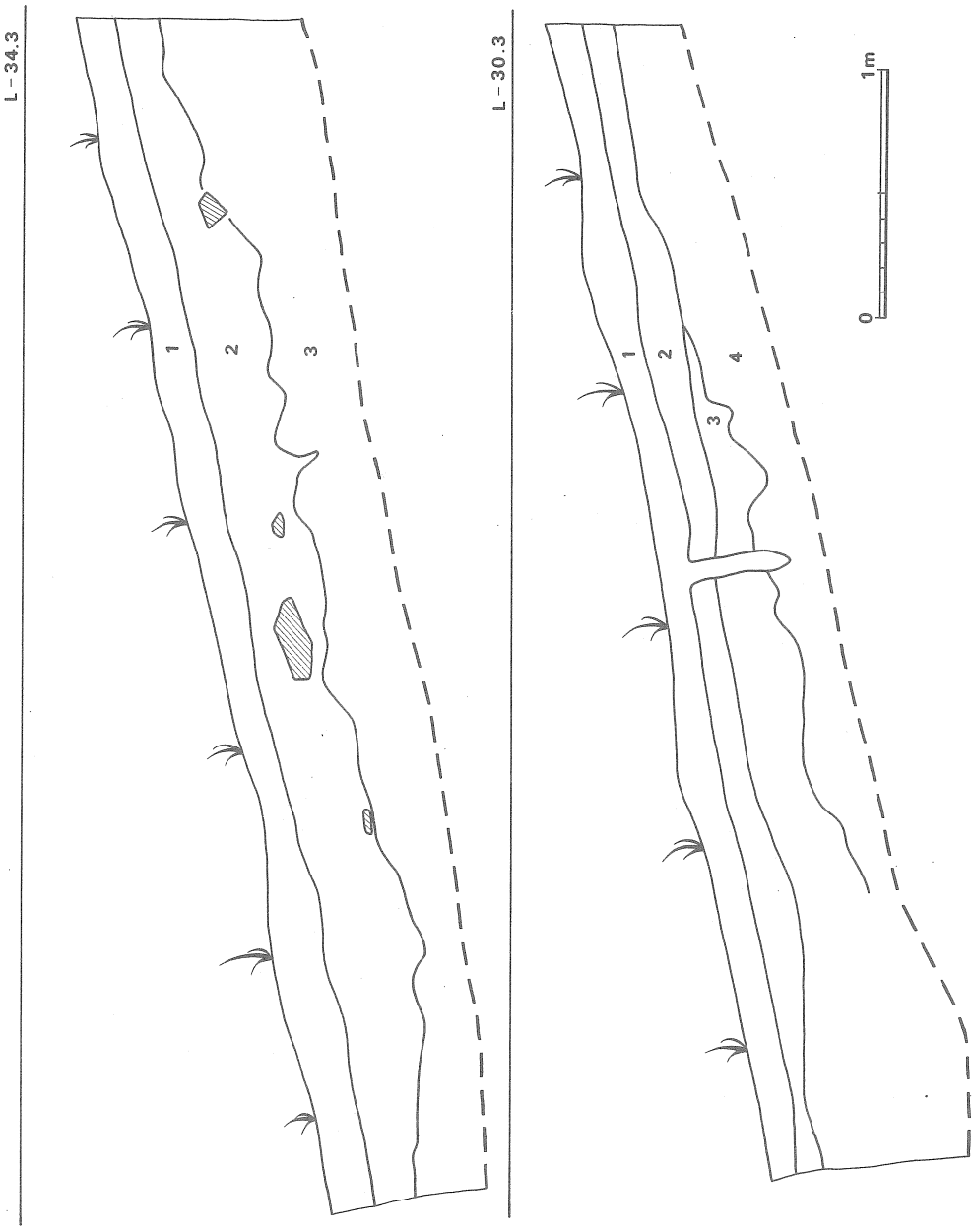
１……表土

２……茶褐色土　粒子は細かく弱粘性を示す。

３……漆黒色土　粒子は細かく均一で粘性なし。層中わずかに風化礫を含む。乾燥するとタテ方向に亀裂が走る。火山灰であろうかと推される。



第 6 図　林ノ辻遺跡地形図および調査区設定図(1/600)



第７図　Ｇ－２・３土層図(1/30)

4……茶褐色土　粒子は細かく均一で2に似る。

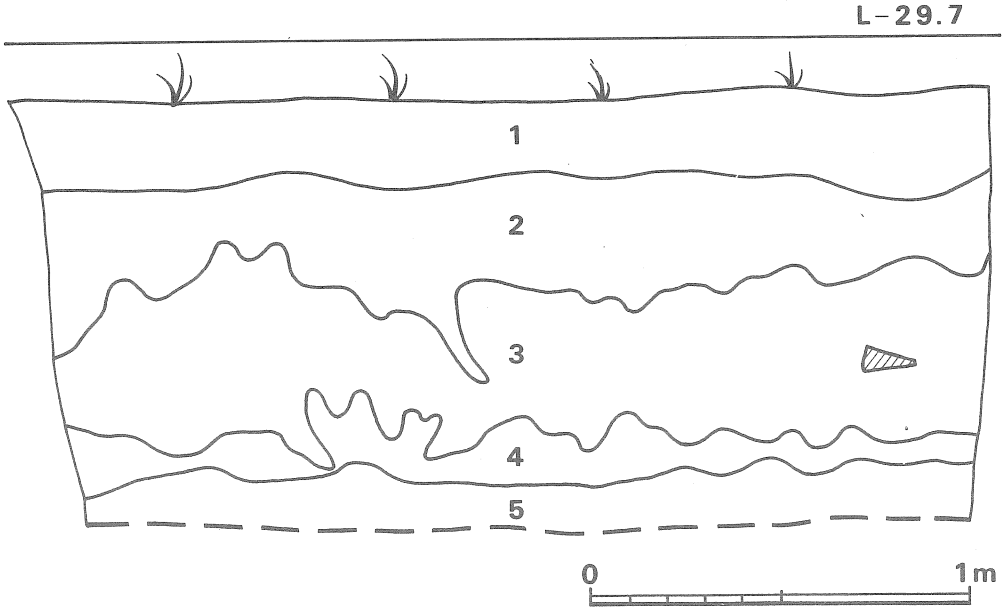
5……黄褐色土　安山岩の風化礫層で指頭大の粒子を混入する。弱粘性を示す。

2層下において弥生式土器を出土する性格不明の土壙を検出している。

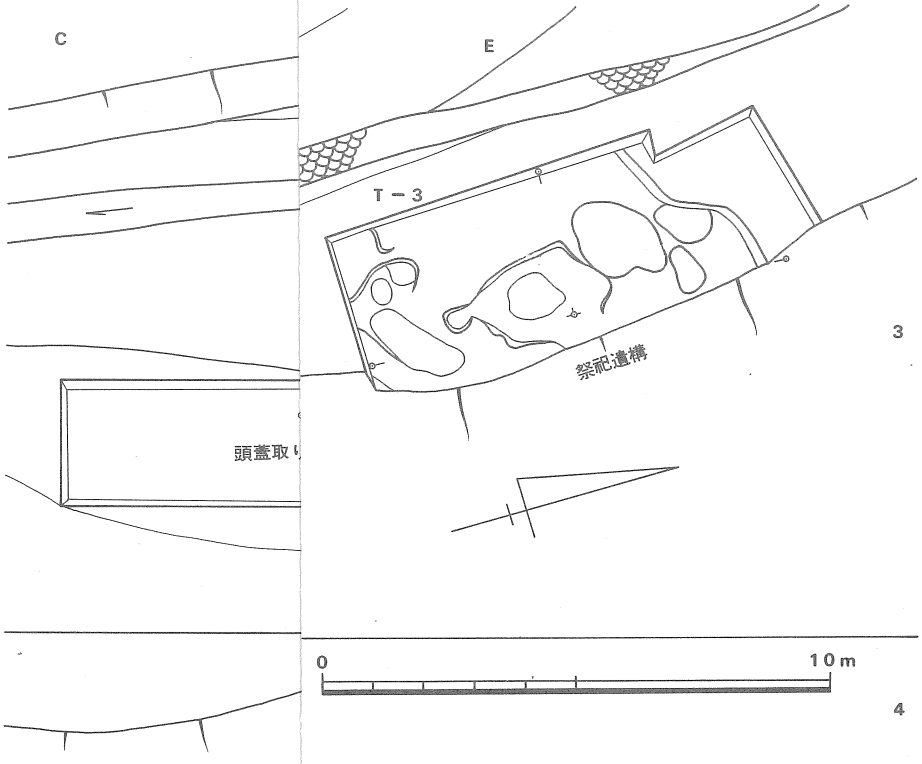
T－1～3　ほぼ同レベルにあり表土，茶褐色土，風化礫層又は赤黄色粘土層という層序を示し似通っている。だが，風化礫層又は赤黄色粘土層（部分的に存在）は法面を観察すると北側から南側に傾斜して行き，第6図のA列あたりで再び上昇し以南へは更に厚くなるという堆積を示している。この層に影響されて上位の層は変化するようであるが現地表のコンターとは無関係であることを指摘できる。

T－4　最高所にあり表土下に風化礫層があり，これを掘り込む形で甕棺が埋納されている。現表土下30cmほどで掘り方となる。往時はある程度の深さに埋納したものであろうが侵蝕によって上位の土層は低位に流下したものと思われる。

包含層はG－1～3，T－4には殆ど存在せず，下方に多く溜る傾向を示している。このことは墓域の形成とも無関係ではないようだ。つまり古い墓域をより高所に作り，その後，筏開して下位に新しい墓域を作る。間断なく続く風や水による侵蝕により高所から低所へ土層が流失する。T－1付近に厚く存在する茶褐色土は以上のことを示していると考えられるが，より広範な調査により成層状況，墓域の形成過程も解明されるであろう。



第8図　G－6土層図(1/20)



3

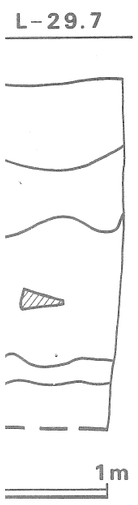
4

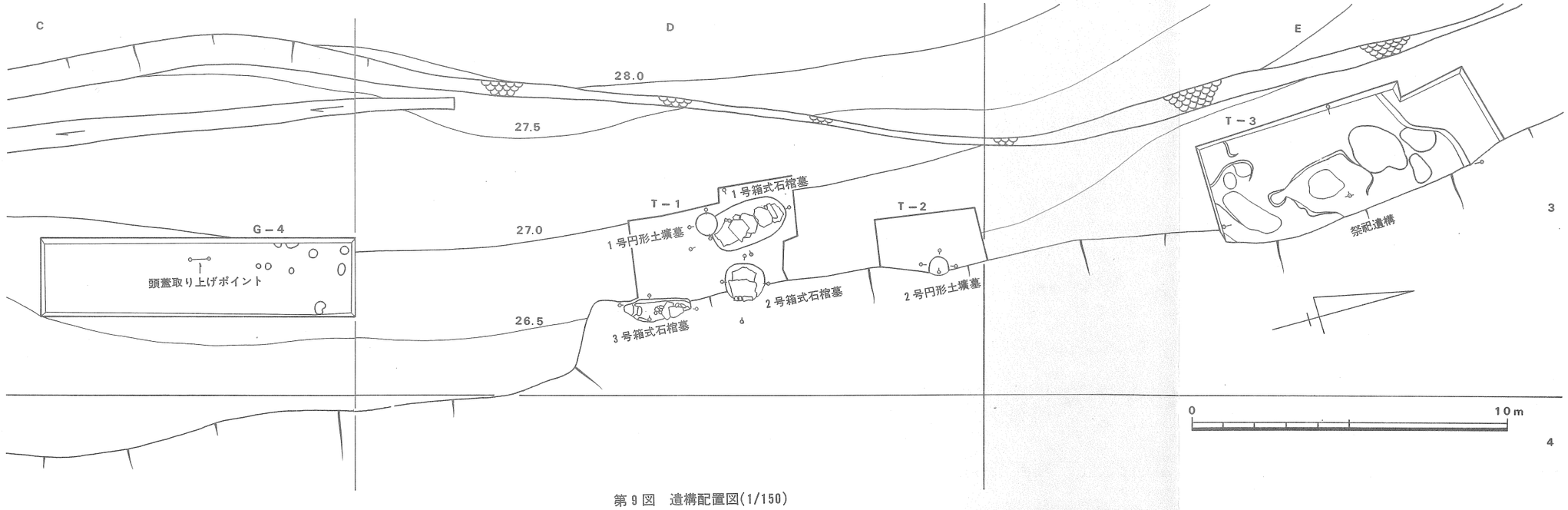
示す。

層という層序を
を観察すると北
くなるという堆
のコンターとは

理納されている。
ろうが侵蝕によ

している。この
り，その後，笄
ら低所へ土層が
えられるが，よ





第9図　遺構配置図(1/150)

Ⅳ 遺　　構

1　遺構の配置（第６・９図）

出土遺構は第２表に示すように各時期の遺構が確認され，本遺跡が長期に恒る墓域として選定されたことを示している。

甕棺はＴ－４においてのみ検出され，昭和55年発見分と合わせ二基存在する。いずれも日用土器を転用した小児用甕棺であり，成人用甕棺の検出はない。Ａ－１を中心とする高位に甕棺墓域の存在が想定される。Ｇ－５出土の集石遺構は拳大の礫で構成され，礫間に土器が存在する。Ｔ－３の祭祀遺構と比較すると，掘り方が明確でないこと，礫のレベルが地形に沿うことなどの相違点を挙げ得るが祭祀関係の遺構と見て大過あるまい。Ｔ－３は規模の大きな祭祀遺構であり底面に小土壙を穿っており数次に及ぶものと推定される。これらの祭祀遺構はＧ－５とＴ－３が直線にして50ｍ，Ｇ－３とＴ－４が同じく50ｍと距っておりＴ－４付近の甕棺墓に対する祭祀遺構とは考えられず，各々の祭祀対象が存在するものと推量される。

箱式石棺墓は三基ありすべてＴ－１において検出されだ。南約10ｍの所にＧ－４のトレンチを設定したが検出できなかった。またＡ・Ｂ・Ｃ－３列を走る溝によっても検出されず、該石棺はより低位に存在したものと考えられる。

円形土壙墓はＴ－１，Ｔ－２，Ｇ－４で検出されており，またＣ～Ｅ－３列以西の造成によって土師質小皿・坏が発見されていることなどにより，この周囲を中心に営まれたと推される。

以上により現段階では次のことが指摘できよう。

・弥生中期の遺構は遺跡のほぼ全域に占地し，Ｔ－４周辺以外にも墓域が予想されること。

・箱式石棺墓，円形土壙墓はより下位に存在したと思われること。

トレンチ	遺　　構	出土遺物	時　期
Ｔ－１	箱式石棺（１号）	鉄鉇１，ガラス玉１	古墳前期
	〃　（２号）	鉄鉇1	〃
	〃　（３号）		〃
	円形土壙墓（１号）	人骨片	中　世
Ｔ－２	円形土壙墓（２号）	土師器皿７，歯 〃　杯１	中　世
Ｔ－３	祭祀遺構	弥生式土器，石鏃	弥生中期
Ｔ－４	甕　棺		〃
Ｇ－４	小ピット群		不　明
		人骨頭蓋	中世か
Ｇ－５	集石遺構	弥生式土器	弥生中期
Ｇ－６	土　壙	弥生式土器	〃
	〃		〃

第２表　遺構一覧表

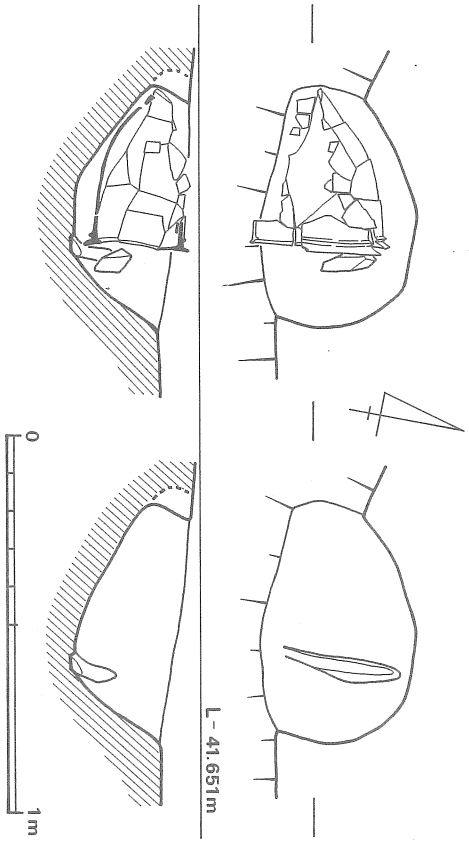
2　遺構および遺物

●甕棺墓（第10・11図，図版３・９）

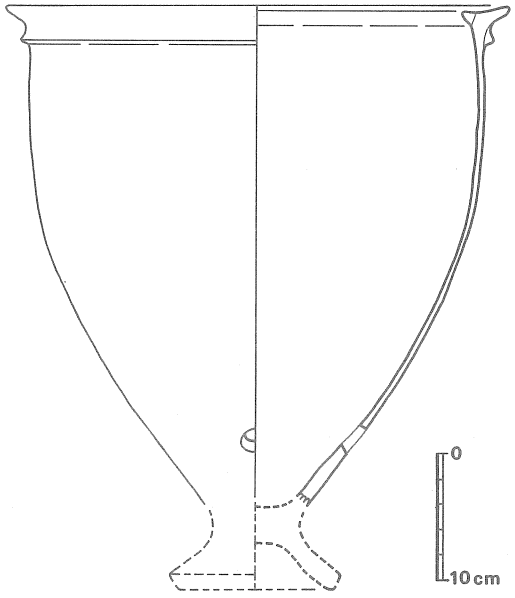
墓壙は長径60cm強の楕円形で安山岩風化礫層に掘り込んでいる。覆土中に10cmほどの礫が少し浮いた状態で存在し，直下の床面には幅３cm，長さ30cmほどの溝が検出された。納棺後，木で蓋をし，石と土で押さえたものである。

甕棺は単棺で主軸はＮ－79°5′－Ｅ，傾斜角4°で口縁部位を下げている。

甕形土器（第11図）は口縁外径40cmを測り，器高は底部を欠失しているため不明。Ｔ字形口縁で内側に突出させる。上面は中凹みで口縁端部は僅かに段がついて尖り気味におさめる。口縁部直下に断面三角形突帯を一条巡らし，張りの少ない胴部へとつづく。脚台が付くと思われる。一孔を穿つ。外面茶褐色，内面黒褐色。胎土，焼成良好。調整は器表が荒れており不明。黒髪式系統の甕で，中期後半の所産である。



第10図　甕棺出土状況図(1/20)



第11図　甕棺実測図(1/6)

●**集石遺構**（第12・13図，図版３）

小児～大人の拳大安山岩礫を用い，地形に沿うように配石がされている。大要は未だ詳らかではないが，安山岩礫を配する状態で南部へ延びるものと推定される。集石は東西２ｍ，南北1.５ｍほどで，東西の比高が 0.4ｍ，南北はほぼ水平となる。礫間には土器を挟んでおり、或るものは礫の下に入り込む状態も見られる。構築面は茶褐色土である。検出時における掘り方は存在しなかった。

遺物は弥生式土器のみが30片ほど検出された。

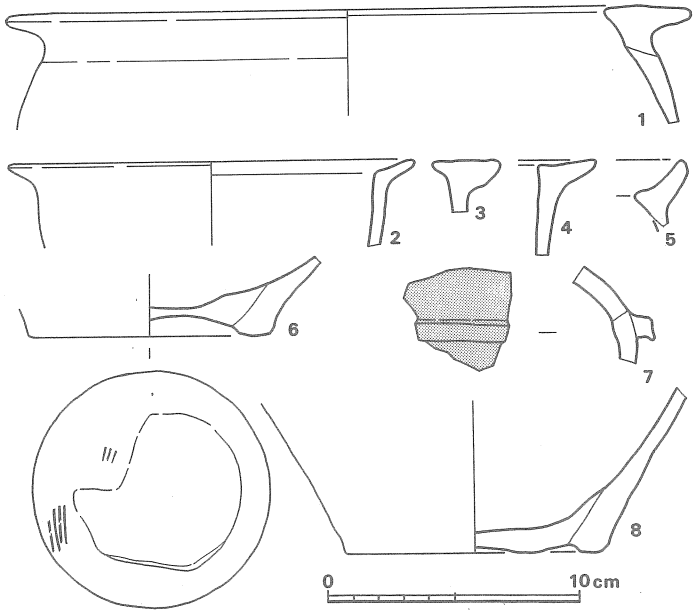
甕形土器（第12図－１～５・８）

１は復元口縁外径27.2cmを測る口縁部で，ほぼ均一に延び上がる胴部に逆Ｌ字形口縁を有する。内側への突出は顕著でないが，かなりシャープである。接合部外面にはクシ描きかと思わせるような浅い沈線がかすかに一条残っている。色調は茶褐色で，胎土には細粒を含む。焼成は普通である。内外面共にナデ調整。２は小型のもので復元口縁外径16.2cmを測る。均一に延び上がる胴部に，外上方へ開く口縁部がつく。上面は僅かに中凹みを呈す。内外面共にナデ。茶黒色を呈し，胎土精良，焼成良好である。外面に煤の付着がある。３はＴ字形口縁をなし，４は２と類似している。５は口唇部が上方へ開くものである。８は底部で復元径10.2cmを測る。僅かに上げ底をなす。灰茶褐色を呈し，１mm大の砂粒を多含する。焼成は普通で，調整は器表が荒れているため不明。

壺形土器（第12図－６・７）

６は底部で片半分のみ上げ底状を呈している。焼成後上げ底状にしたと推され，段がつく部分と，つかない部分がある。茶灰色を呈し，胎土精良。焼成良好で，底径 9.4cmを測る。内外面ナデ，底面ハケのちナデ仕上げ。７は胴部突帯部片で断面方形の突帯を貼付。胎土は１mm大の細粒を含むが精良。焼成良好。内面ナデ，外面ナデの後，丹を塗付している。

以上の土器は中期中頃～後半のもので，集石遺構の築造・存続時期を示している。



第12図　集石遺構出土遺物実測図(1/3)

第13図　集石遺構実測図(1/30)

●**祭祀遺構**（第14～17図，図版４）

平面プランは現段階では不詳であるが不整形を呈すると推定される。Ａ－Ｂで約 8.5mほどを測るが，軸が少し東に振れているため実際の遺構の長さは７ｍ前後を測ると推される。東側は土取りによって破壊されているため不明であるが、ほぼ中央部で４ｍほど残存している。よって検出時の規模は７ｍ×４ｍほどであった。掘り方は北側で明確に残っており、赤黄色を呈する粘土層を約30cmほど掘っている。西北隅の標高が上がる部分では60～70cmと深い。この大土壙は標高にほぼ沿うよう掘られていることを示している。大土壙の肩部が地形に沿って掘られているため比高があるのに対し，床面は意識的にほぼ水平を保つように形成されている。床面には更に小土壙が６ケ所穿たれている。略円形～楕円形を呈するもの（１・２・５・６号小土壙），溝状をなすもの（３・４号）がある。小土壙の床面は平坦なもの（３・４号），浅い舟底状のもの（１・５・６号），二段掘りのもの（２号）がある。

第14図は大土壙の覆土土層図である。

１．茶褐色土　　粒子は均一で粘性がある。炭化物片を含む。

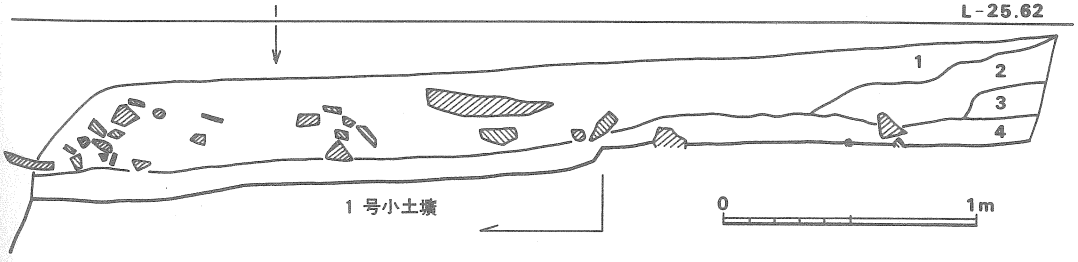
２．赤茶褐色土　粒子は均一で粘性がある。親指大の安山岩・砂岩礫を含む。

３．赤褐色土　　粒子は均一で粘性がある。親指大の安山岩・砂岩礫を含む。

４．黄茶色土　　粒子は均一で粘性がある。

土層は西側が高く東側が低い堆積状況を示しており，層中に含まれる炭化物の小片等よりすると自然堆積の感を強くせしめるものがある。４層は粘性の強い層で大土壙・小土壙の床面ほぼ全面に拡がっている。この層中には小片と化した土器片を特に多く含んでいた。この４層の下が床面であるが、床面は非常に堅く締まっており，１cm程度の厚さがある。色調は黄系色の強い黄赤色を呈しており，鉄錆のような感を与える。この床面の生成については詳らかにし得ないが，鉄分やマンガン分を多含する風化礫層（火山の泥流堆積物）の酸化泥積物ではないかと思われる。また，トレンチ南壁の１層中には炭化物の集積層が浅い皿状に認められた。

礫は拳大～二抱え程のものまであり，かなりの多数にのぼる。１号・２号小土壙のほぼ中央部には大振りの石を据えており，この石のほぼ中位のレベルから下位に礫が多出する傾向にある。土器も同様である。多数の礫は２号小土壙の部分に特に多く存在し，この小土壙が祭祀の



第14図　祭祀遺構土層図(1/30)

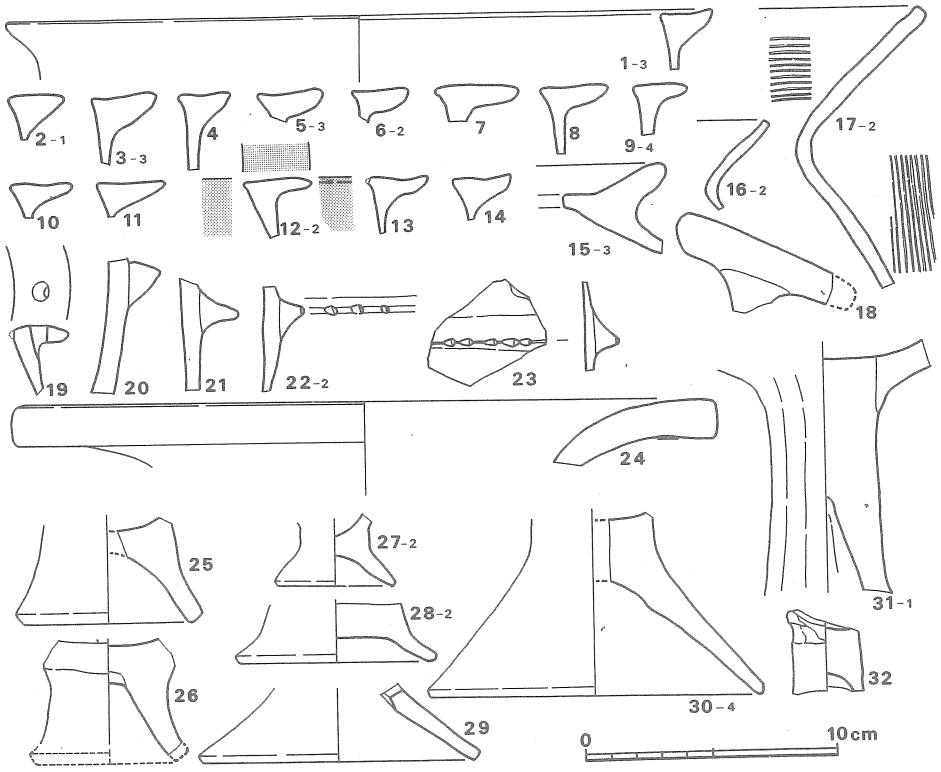
中心を占めていたものであることを窺わせている。

土器は全て小片と化しており，器形の大要を示すものは少ない。また，復元可能な土器も存在せず，当遺構の機能を示しているかのようである。約 250片ほどの土器の出土があったが，実測可能の32点を図示した。（図中の続き番号の次の小さな数字は小土壙の番号を示し，表示がないものは小土壙に帰属させることが取り上げ時に不可能であった覆土中のものである。）

甕形土器（第15図－1～18）

口縁部の形態により５種８類に分類が可能である。

Ⅰａ	断面三角形を呈し上面が平坦なもの	2
Ⅰｂ	断面三角形を呈し上面が凹むもの	1，3，4
Ⅱａ	逆Ｌ字形をなし上面が平坦なもの	7，9，12
Ⅱｂ	逆Ｌ字形をなし上面が凹むもの	5，6，8，14
Ⅲ	上面の凹みが口唇近くにあり断面Ｙ字形をなすもの	10，13，14
Ⅳ	く字形に折れるもので内側への突出が強いもの	15
Ⅴ	Ｔ字形口縁を有する大形のもの	18
Ⅵ	く字形口縁をなし外上方へ大きく延び上がるもの	16，17



第15図　祭祀遺構出土遺物実測図その１(1/3)

丁能な土器も存
上があったが。
号を示し，表示
ものである。）

第17図　祭祀遺構実測図(1/30)

これらの土器は黄～赤灰色を呈するものが多く，12のように丹塗り土器もある。胎土は精良で焼成も良好である。調整は４，７，８，18がヨコナデ，15が口縁部ヨコナデ，胴内部ナデ，17が口縁内面ハケのちナデ？仕上げの外は器表が荒れているため不明である。15，18はやゝ大形の口縁部で，棺として使用したものであろうか。

壺形土器（19～23）

19は口縁部に穿孔を有し，黄赤色を呈す。胎土精良，焼成良好。調整は不明。20～23は胴部三角形突帯部位で，22･23のように刻目を有する例もある。黄褐色で胎土精良，焼成良好。外面ヨコナデ，内面ナデ仕上げ。24は広口壺で口縁外径28cm。赤褐色で胎土・焼成良好，調整不明。

脚台部（25・26，28～30）

25・26・28は甕脚台部と推され２類ある。25・26は深い上げ底からやゝ湾曲しつつも直線的に延びる脚台で，端部は平坦におさめる。28は上げ底天井部が広い面をなし，湾曲しつつ延び端部は丸くおさめている。29・30は相似た形態を示すが，29は穿孔を有する。25は脚台内面ナデ仕上げ，外面不明。底径 7.4cm。28は内面灰黒色，外面黄灰色で，胎土は細砂を含むも精良。調整は不明。底径８cm。29は黄褐色で胎土精良，焼成良好。内外面共にナデ仕上げ。底径10.8cm。30は内面黄茶色，外面赤黄色で，胎土は精良。焼成良好で，調整不明。底径13.4cmを測る。

高坏形土器（31）

脚柱部片で，赤褐色を呈し，胎土は砂粒を含むも精良。焼成は良好である。坏部底面はナデ脚柱部内面にシボリ目を残す。外面は１cm程のヘラ様の工具でタテに調整し，のちナデ仕上げ。

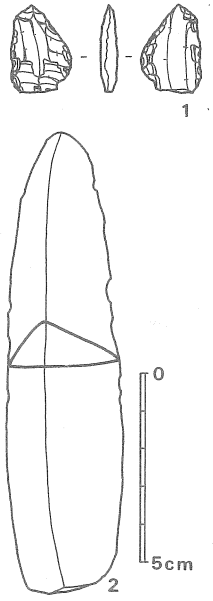
ミニチュア土器（27・32）

27は高坏の脚部と推されるもので，手捏ねである。黄赤茶色を呈し胎土精良，焼成良好。調整不明で底径８cmほどを測る。脚裾部は大きく開き，端部は丸くおさめる。32は器台と推されるもので口縁部は一部完存しているが，脚裾部は欠失。手捏ねである。色調は黄茶色，胎土は精良で，焼成も良好である。脚柱上部はユビによる押えのため若干凹んでいる。器高は不明であるが５cm前後であろうと思われる。脚柱部の径は 2.5～2.7 cmと少しイビツである。

石器（第16図１・２）

１は安山岩製石鏃で，周縁より荒いリタッチを施し，刃部を形成している。２は若干風化の進んだ安山岩を素材とした石槍と見られるものである。周縁には刃こぼれ様の潰が看取され，基部は丸く成形する。断面三角形を呈す。ともに１号小土壙出土。

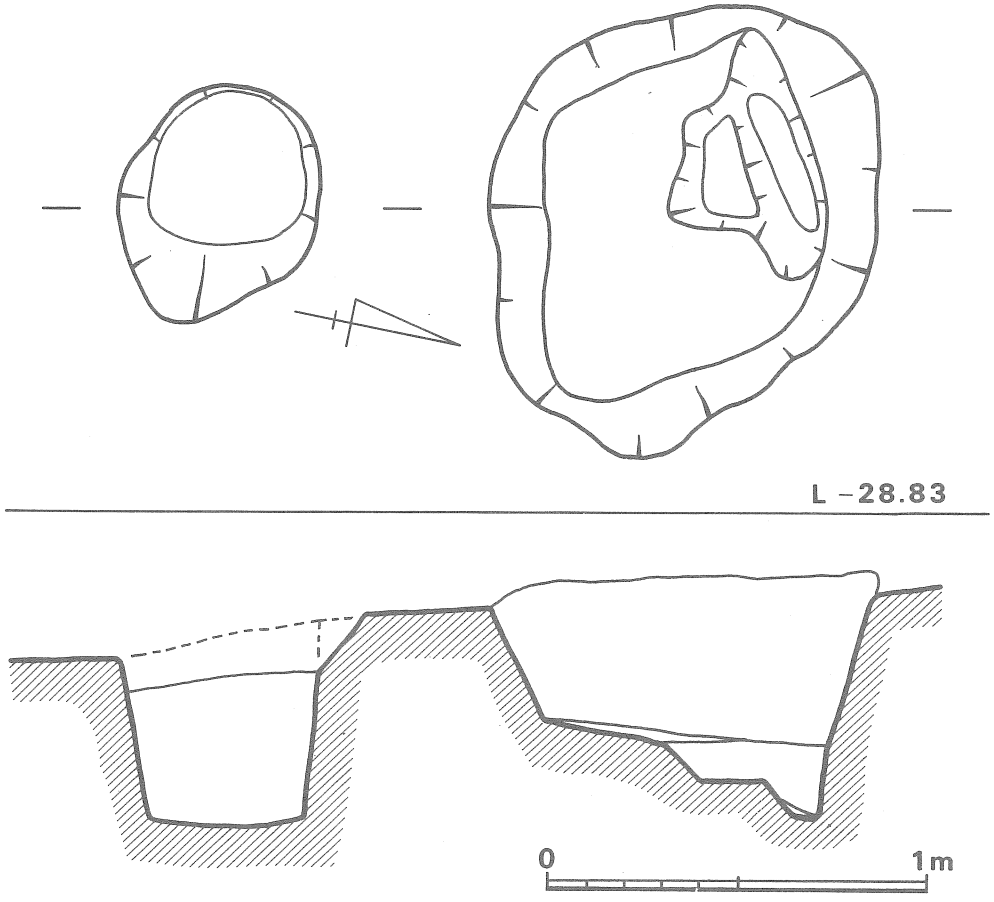
以上，祭祀遺構及び遺物の概略を記したが，遺物は中期を主体とする。資料の僅少さ及び性格から正確さに欠けるが，甕形土器で５種８類に分類できる。Ⅰ類は城ノ越式に影響されて醸成されたものと見ら



第16図　その２(1/2)

れるもので中期前半に比定されよう。II類は須玖式に近いタイプと考えられる。更に小区分のaからbへの移行が考えられる。よってI類は中期前半，II類は前半から中頃，III類は中頃から後半，IV類は後半から末頃に比定されると考える。V類としたものは大形の甕形土器で中期中頃～後半に比定されよう。VI類としたものは最も新しく古式土師器と考えられる。このVI類は後世の攪乱による混入と思われる。祭祀遺構から見て中期前半～中頃に営まれたものと思われ，その後長く放置されたようである。

祭祀遺構はこの遺跡内に住居址，生産址等の存在が予測されない状態であることより，送葬祭祀を執り行った場と考えられる。祭祀終了時には小土壙上に大石を据えることにより，その意味を持たせたものと考えられる。また，壙中には指頭大の炭化物やその集積層が認められるところから播火に類する風習もあったと推測される。屍者に対する敬虔な祭りの場，共同祭祀の場であったことを想定させる。



第18図　円形土壙実測図（1/20）

● **円形土壙**（第18・19図，図版４）

大小二基検出した。北側土壙は略円形の平面プランを呈し，床面は三段となる。壁面はほぼ垂直に近く立ち上がる。この土壙内からのみ遺物の出土が約300片程あった。当初は甕棺墓壙かと思われたが，その片鱗なく土器片のみの出土を見せ，性格不明である。南側土壙は円形プランで床面はフラットである。壁面立ち上がりはほぼ垂直である。肩の一部を掘りすぎている。遺物の出土はなかった。この二基は２層である茶褐色土下の３層漆黒色土に掘り込まれており，同時期の所産である。また２層は弥生中期中頃以降の再堆積土であることを示している。

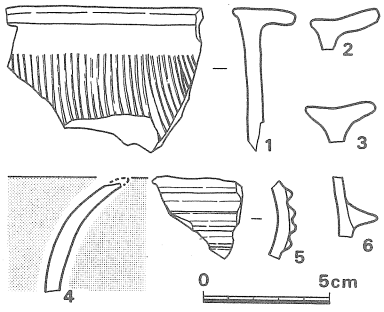
遺物は土器片のみであり６点を図示した。

１～３は甕形土器で細部において各々異なっている。１はＴ字形口縁をなし，平坦口縁である。胴内面から口縁端部まではヨコナデ，口縁下部はハケのちヨコナデ，胴部外面はタテハケの後ナデにより調整。茶褐色を呈し，胎土は精良。焼成は良好である。２は１と同様Ｔ字形口縁をなすが中凹みしている。ヨコナデ仕上げ。茶褐色を呈し，胎土は精良。焼成良好である。３はＹ字形に近い口縁部で端部は丸くおさめる。ヨコナデ調整。淡褐色を呈し，胎土は精良。焼成も良好である。

４～６は壺形土器である。４は丹塗り土器の口縁部片で，胎土は精良，焼成も良好である。口縁部内外面共にヨコナデ調整の後，丹を塗付している。５は胴部の突帯部片で，断面三角形突帯を四条巡らしている。色調は外面茶褐色，内面黄褐色を呈す。胎土は精良で，焼成良好である。６は胴部突帯片で，黄褐色を呈している。胎土は精良で，焼成も良好。調整は器表が荒れているため不明である。

出土土器は甕，壺，高坏などの器種を含んでいるが，甕が主体を占めている。大きいものでも10cm程で，他はすべて少片　細片と化している。中には高坏のように脚部の縦割れしたものもあり人為的な破砕の可能性が高いようである。また接合可能な破片も少なく，全体の器形を知り得る例がないことも人為的な破砕を示唆しているようである。

これらの土器は中期中頃～後半のものであり，本遺構も中頃～後半の所産と見られる。



第19図　円形土壙出土遺物実測図(1/3)

● **箱式石棺墓**

三基を検出し，調査順に1 ～ 3と番号を付した。各々主軸，構築法などにおいて異なる。また封土，周溝等の施設は調査段階では確認できなかった。棺内は土砂で充塡しており人骨の検出はなかった。

1号箱式石棺墓（第20・21・25図，図版5・9）

地形に沿うように主軸をとっており，N－7°－Wである。使用された石材はすべて砂岩の板石で，本遺跡の南西方1㎞に産出する。以下構築順序に従い記述する。

墓壙は245×130㎝を測る楕円形で深さ50㎝内外を測る。底面には側石及び小口石据置の掘り方を有する。立ち上がりはほぼ垂直に近く，西側では二段掘りになっている。東南隅は1号円形土壙墓により一部破壊されている。

石棺の法量は内法で長さ1.8m，南側小口幅38㎝，東側小口幅26㎝，最大幅48㎝で頭位は南側にある。また深さは20 ～ 30㎝を測り，頭位の方がやゝ深くなっている。

東側壁は3枚の板石を一部重複させて据え，西側壁も4枚使用して同様に築く。頭位に比べ足位の据石がやゝ荒い。側壁外側に2ケ所の黄赤色粘土による目張りを施す。小口石は両側壁の内側に据えており，内方へ倒れ込む力を緩和するよう配慮されている。

棺床面は板石を隙間なく敷き詰めており，頭位に石枕を据えている。北側足位が僅かに上がっているがほぼ水平に保たれている。

蓋石は先ず4枚で全面を覆い，隙間に黄赤色粘土で目張りを施し，　更に5枚の板石で目張り部分を保護するように被覆している。この最上位の蓋石も目張りが一ケ所施され，この目張りは側壁外側の目張りへと連続している。

副葬品は棺内石枕東に，棺床面から9㎝浮いた状態でガラス玉が1個検出された。また腰部の東壁寄りに鉄鉇1本が出土したが，既に原位置を離れていた。

蓋石実測後，棺内精査のため取り外しに掛かると東側壁外側に粘土目張りがあった。この粘土目張りを精査すると側壁上面より約4㎝下位に灰色を呈する空隙部が存在した。これは何かを粘土目張りに埋め込み,腐触して出来たスタンプであろうと推察された。断面はすでに半分は破壊して了った訳であるが,他の半分は残存した状態であった。残存部の断面は半円形を呈し径約2㎝を測る。全長は45㎝程で南側は尖がり気味に終るようである。この棺外副葬品は木製の弓であろうと推測される。

2号箱式石棺墓（第22・23図，図版6・9）

昭和55年5月の現地踏査で確認されていた石棺で，当時既に小口部が破壊されていた。

1号にほぼ直交するように構築されており，主軸はN－72°－Wである。遺構は2分の1強残存しており，特に残存部が頭位であったのは幸いした。

墓壙は現存長120㎝，最大幅134㎝を測り，楕円形状であったと推測される。深さは60㎝前後を測る。壁面の立ち上がりはほぼ垂直に近いが，北側では二段掘りとなっている。また西壁小

いて異なる。ま
ており人骨の検

すべて砂岩の板

コ石据置の掘り
東南隅は１号円

cmで頭位は南側

く。頭位に比べ
小口石は両側壁

位が僅かに上が

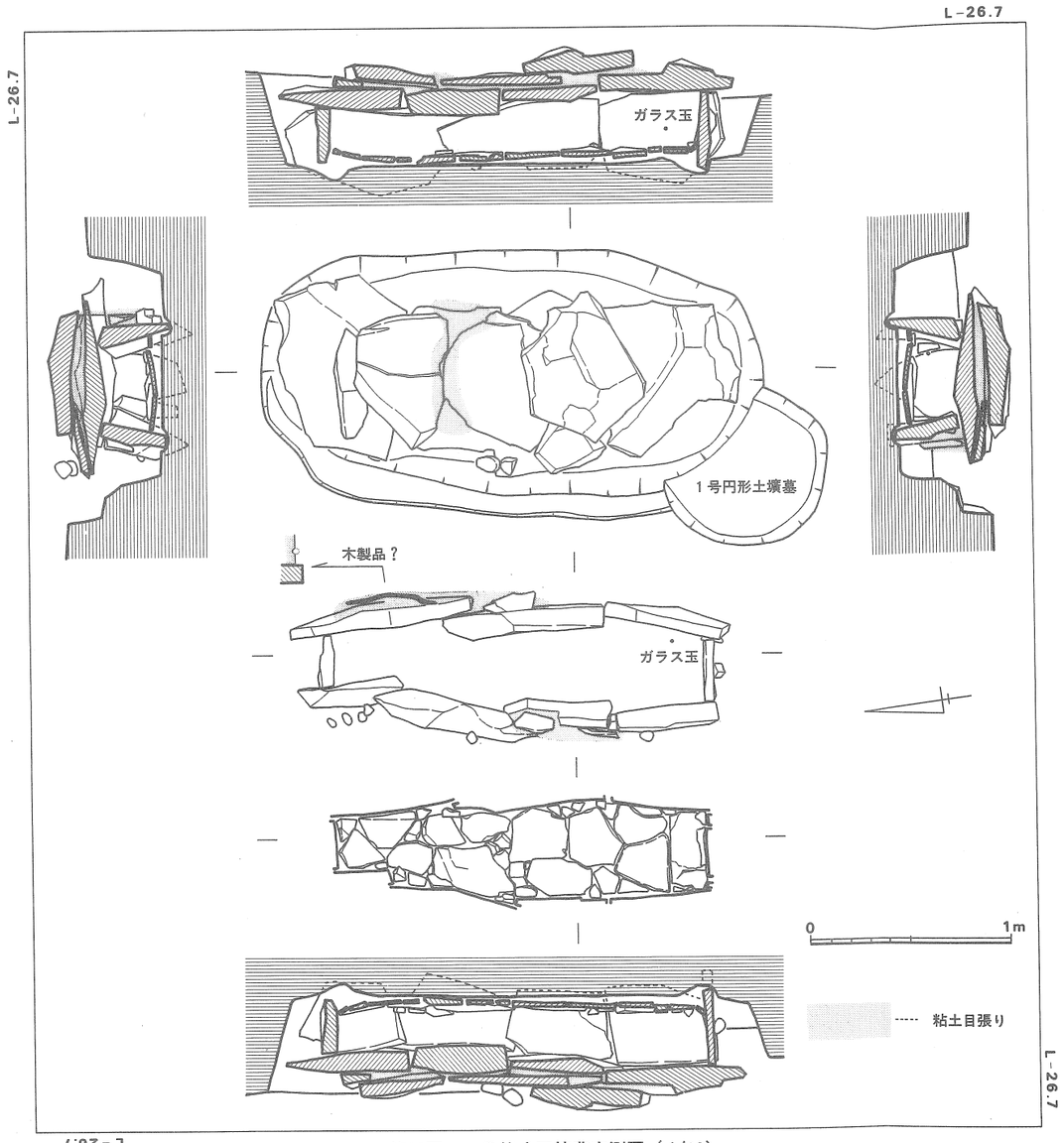
枚の板石で目張
され，この目張

れた。また腰部

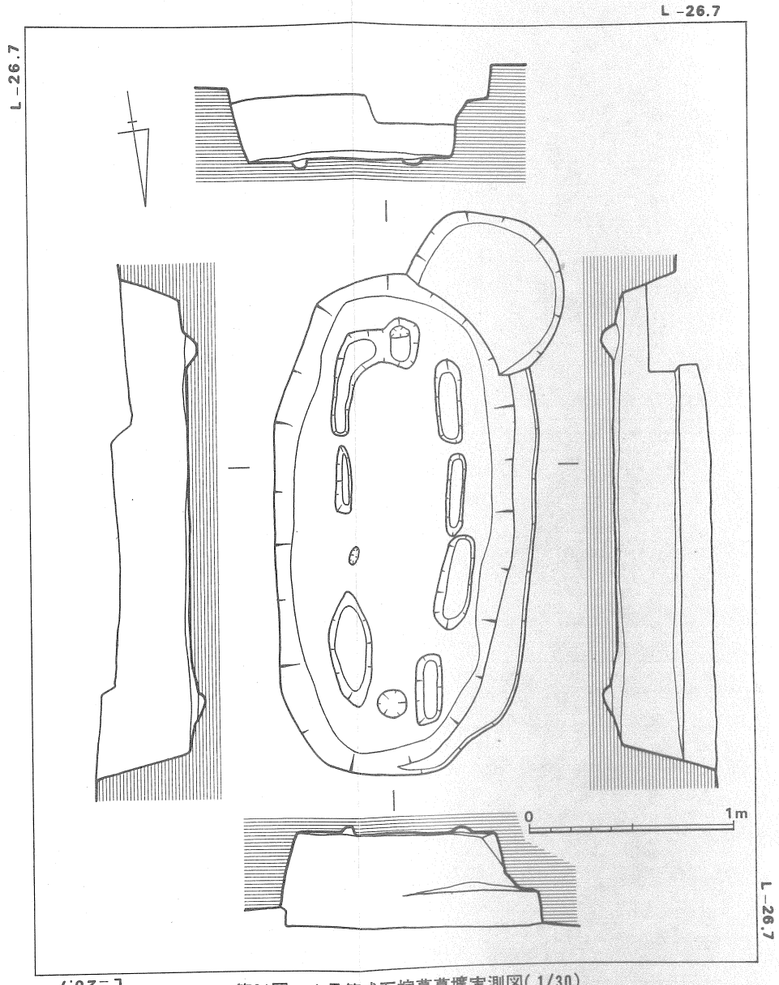
あった。この粘
た。これは何か
はすでに半分は
半円形を呈し径
副葬品は木製の

れていた。
は２分の１強残

深さは60cm前後
る。また西壁小



第20図　１号箱式石棺墓実測図（1/30）

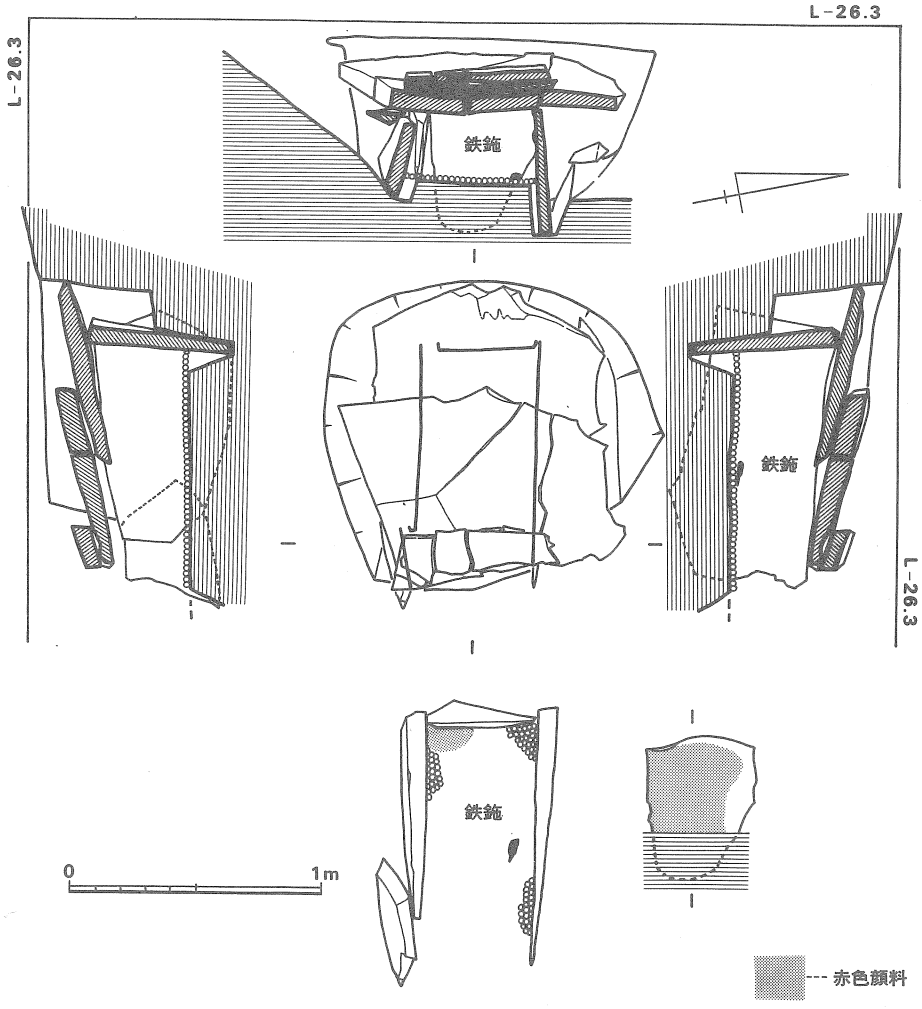


第21図　１号箱式石棺墓墓壙実測図(1/30)

口部では幅15cm，長さ40cmほどの段を残している。これは小口石の持たせ掛けと両側壁の内方への倒壊を防ぐための施設である。底面には溝状の掘鑿をなし側石据置の基礎としている。小口部で18cm，北側壁で20cm，南側壁で10cm前後掘鑿している。床面は北側が僅かに低いがほぼ水平に保っている。

石棺構築の石材はすべて砂岩の板状石を使用している。石棺の法量は内法で現存長１ｍ，幅45cmを測る。深さは30～38cmで頭位が深い。側壁は北側１枚，南側２枚が遺存している。小口部は１枚の板状石を据置しており，両側壁の内側に入る。小口石にはほぼ全面に赤色顔料が塗付されており，また小口部の床面にも認められ頭位であったことを示している。

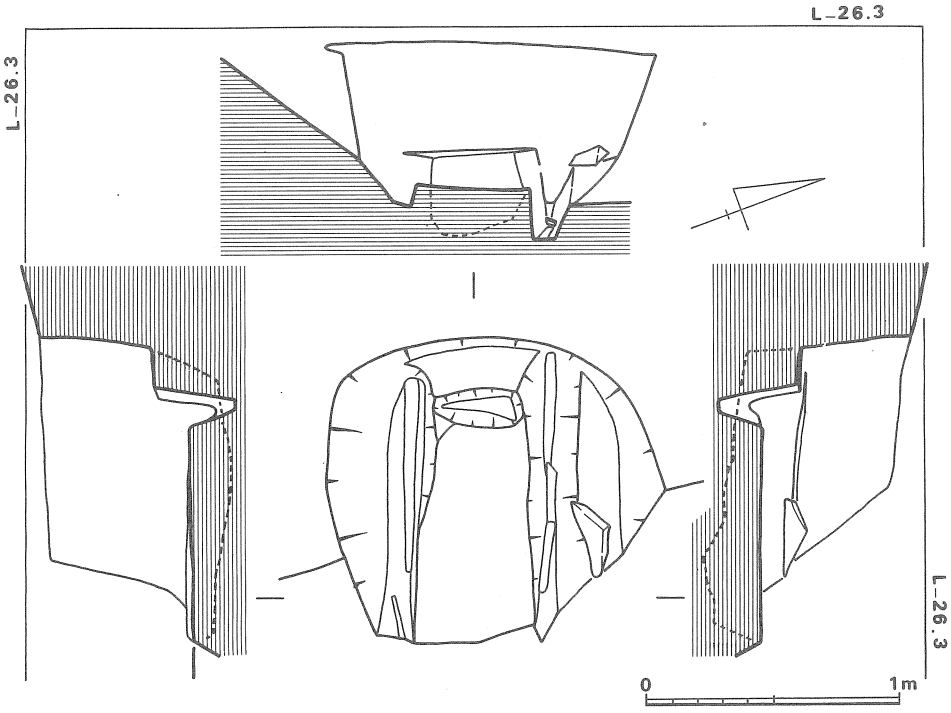
棺床面は指頭大～３cm程度の河原石を隙間なく敷き詰めて床面としている。



第22図　２号箱式石棺墓実測図(1/30)

蓋石は頭位から足位へ順次被覆する方法がなされている。よって最初の蓋石の末端に次の蓋石が重なり合った状態を示している。

副葬品は棺内床面上において鉄鉇1本を検出した。



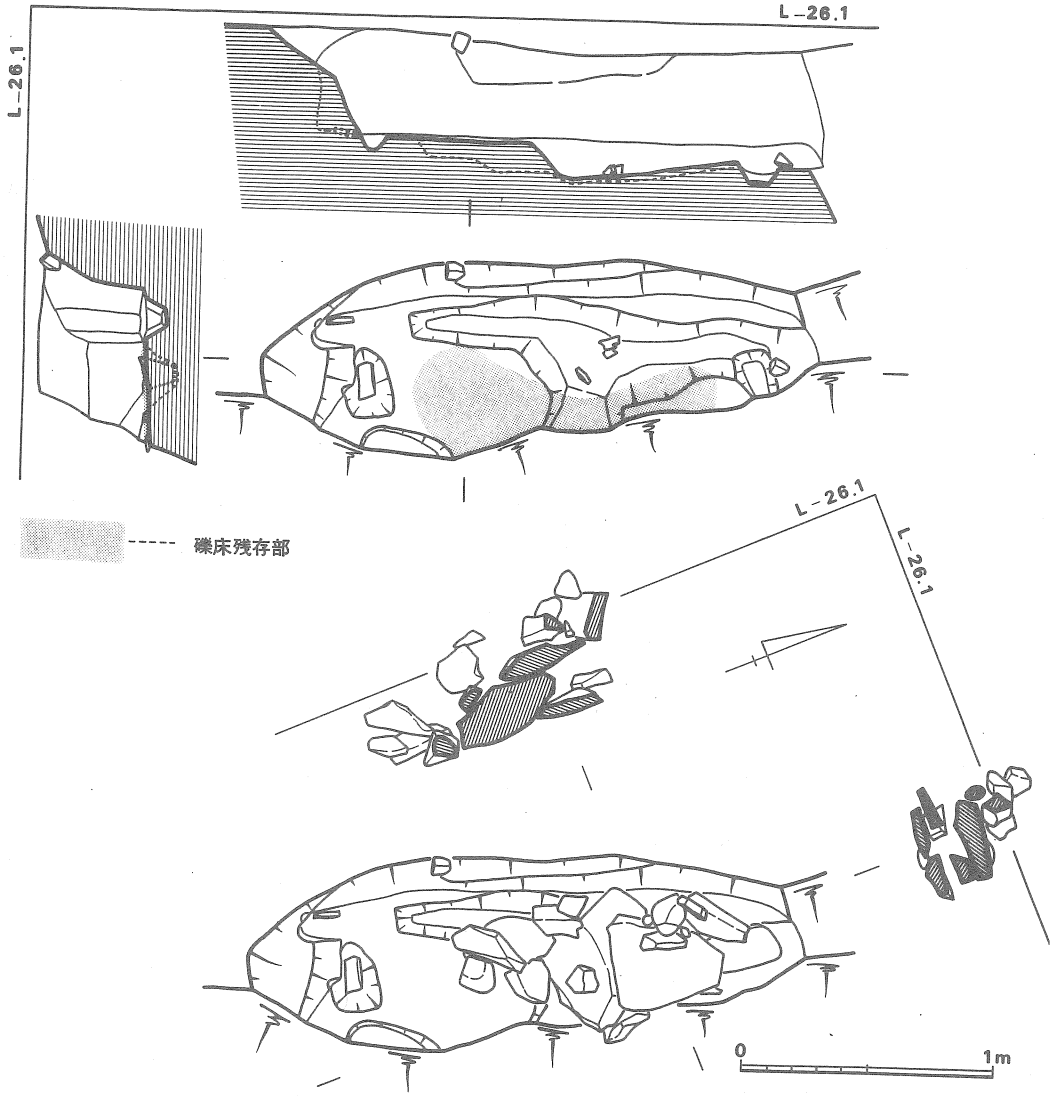
第23図　2号箱式石棺墓墓壙実測図(1/30)

3号箱式石棺墓（第24図，図版７）

２号の南１ｍに位置し，主軸はＮ－18°－Ｗである。ほぼ半分を土取りによって破壊されていた。調査当初，茶褐色土層中に砂岩及び安山岩の挙大～一抱え大の石材が積み上げられていたため標石的なものかと推されたが　その後の精査により後世の攪乱であることが判明した。またこの石材の存在により本石棺が床面近くまで破壊され，石材が抜かれて了ったことも了解された。

墓壙は現存部で長さ2.2ｍ，幅80cm，深さ40cmほどを測り，元来はもう少し大きかったものと思われる。側壁の立ち上がりはほぼ垂直である。南側を頭位としたようで２号と同様の段を有している。底面には側石及び小口石据置のための掘り方を溝状に掘鑿している。

石棺は石材がすべて抜かれた状態にあり，根締めに使用した石が看取されるにすぎない。石



第24図　３号箱式石棺墓実測図(１/30)

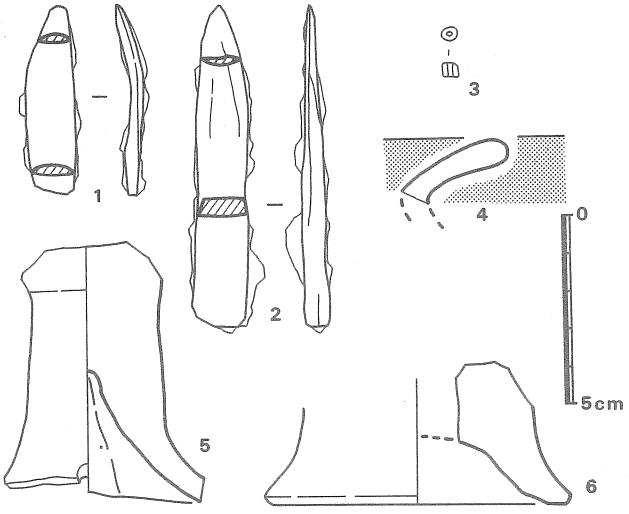
棺の組み方は糸巻き形(⊞)と推定される。規模は側石及び小口石の掘り方，礫床の範囲から勘案して長さ1.5m，幅50cm前後であろう。棺床面は礫床で指頭大の河原石を使用して厚さ2cmほど敷いている。

副葬品等の出土は見られなかった。

箱式石棺墓出土遺物（第25図，図版９）

１は現存長5.1cm,幅1.3cmを測る鉄器で,形状からして鉈であろう。茎部は欠損していると思われる。茎端部より3cmの所で反っており，この部位が刃部であろう。とすれば刃部長2.1cm，幅1.3cmとなる。断面は刃部，茎部共にカマボコ形を呈している。鍛鉄製である。1号箱式石棺々内出土。２は現存長8.5cm，刃部長1.8cm，刃部幅1.1cm，厚さ2mm，茎部長6.7cm，茎部幅1.4cm，厚さ5mmを測る鉄鉈である。茎部は断面悌形，刃部三日月形を呈し，中央部が少し凹んでいる。鋒は尖鋭である。鍛鉄製で２号箱式石棺棺内より出土した。３はガラス製の小玉で淡い青緑色を呈している。長さ4mm，径4×3.5mm，1.5mmほどの紐孔が通る。断面は扁円形を示し，管状の素材から切断して製作されている。１号箱式石棺棺内出土で，　覆土を水洗したにも拘らず１点のみの出土であった。４は丹塗り壺の口縁部片で，端部は丸くおさめている。ヨコナデ仕上げ後，丹塗付。胎土精良で焼成良好である。６と共に１号箱式石棺墓墓壙内より出土した。６は甕脚台で原形の$\frac{1}{4}$ほどを残す。赤褐色を呈し，胎土に細砂を含む。焼成は普通である。調整は不明。５は高坏脚部で，エンタシス状をなす。裾部への屈折位に径5mmほどの円孔を３ケ所に穿っている。内側にはシボリ目を残す。赤褐色を呈し，胎土精良，焼成は普通。調整は不明。３号箱式石棺上の集石中より出土した。

これらの箱式石棺墓は，相隣接して営まれており，棺構造において若干相違しているが，時間的にあまり隔たることなく築造されたと考えられる。弥生時代終末から古墳時代初頭に比定できよう。



第25図　箱式石棺墓出土遺物実測図(1/2)

●円形土壙墓

本遺跡検出の遺構群の中で，最も新らしい一群である。土壙墓は円形を呈するものが２基及び頭蓋骨のみの検出で墓壙の確認ができなかったＧ－４出土のものを一応この類に含めることとした。

各々の土壙墓からは人骨片が確認されたが，ともに保存状態が極めて悪い。その詳細については後章において述べられている。

１号円形土壙墓（第26図，図版８・10）

１号箱式石棺墓の墓壙西南隅を破壊して作られている。径90×75cm，底径75×65cm，深さ30cmほどである。掘鑿面は茶褐色土でほぼ垂直に近く掘られている。壙内の覆土は

１　淡黒褐色土　ぼそぼそとした土で締まりがない。

２　淡褐色土　茶褐色土の再堆積土と推され，ブロック状の土塊である。微細な安山岩風化礫を混じえ，炭化物を含む。

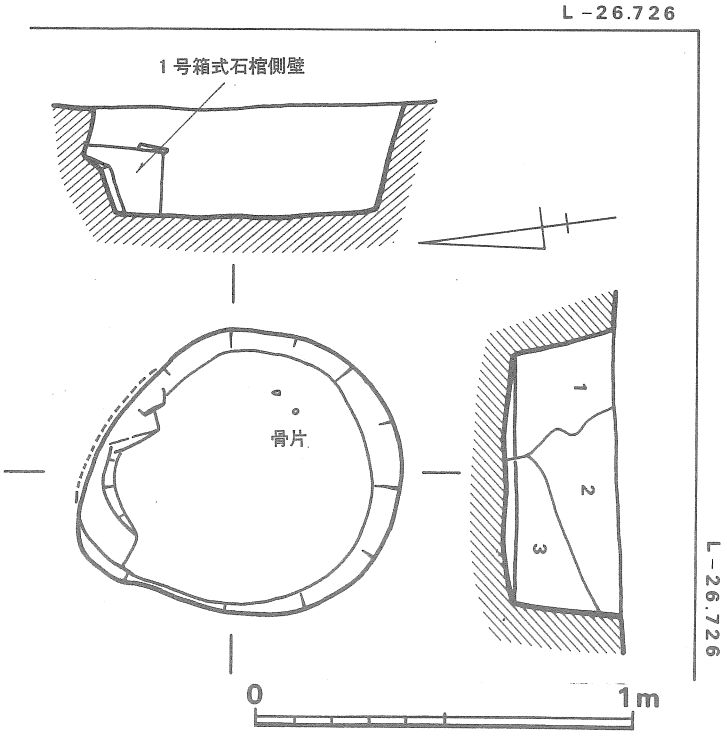
３　淡褐色土　２とほぼ相似た色調，成分を示すが若干粘性に富む。

覆土堆積の状態は後の流れ込みを示している。深さが30cmほどで浅く棺の使用はなかったと推定される。上面を木蓋等で封じたのであろう。土盛り，標式的な墓石等の存在は見られなかった。人骨は検出面において僅かに散見された。遺物の出土はない。

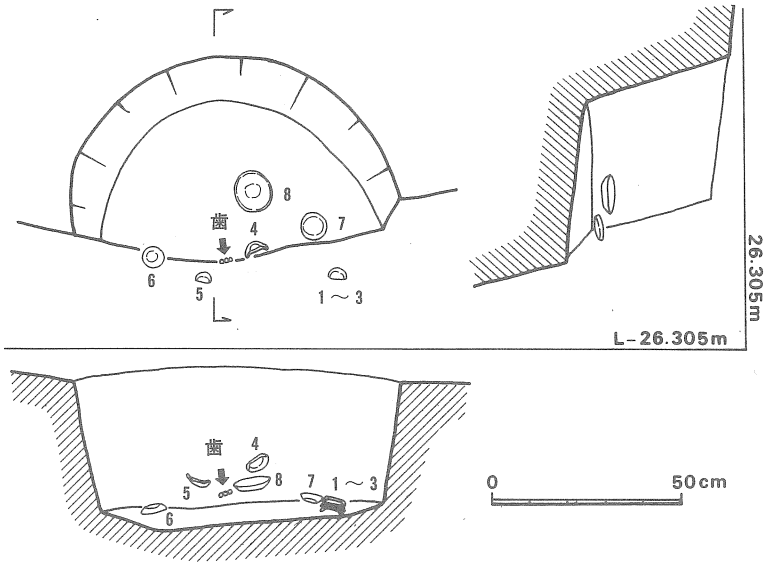
２号円形土壙墓（第27・29図，第3表，図版８・９）

土取りにより半載されている。形状は１号と同じく円形で上面の径90cm，底径80cm，深さ40cm内外を測る。覆土は茶褐色土で締まりのない土が流入している。

遺物は土師質の小皿８枚，坏１枚が壙底より僅かに



第26図　１号円形土壙墓実測図(1/20)

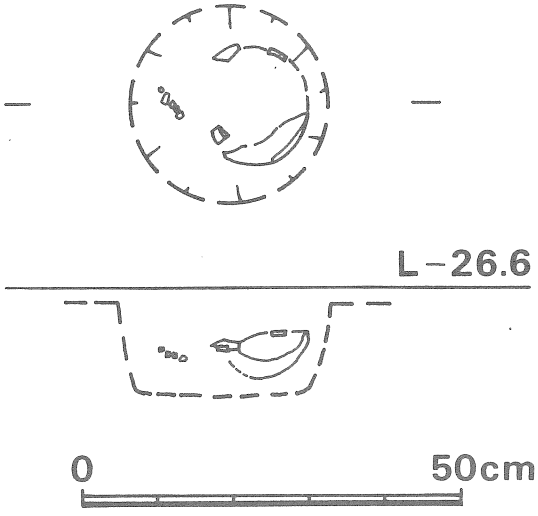


第27図　2号円形土壙墓実測図(1/20)

浮いた状態で検出された。また露出法面において歯の残存が認められた。棺の使用は不明。

土盛り，墓石の存在もなかった。

土師質の小皿は7枚あり，ほぼ同形・同大である。粘土塊からロクロ水挽きにより成形・調整されており，6以外はすべて回転糸切りにより底部を切り離している。成形の特徴は底部がやゝ上げ底で，体部まで若干波打つような凹凸を見せて立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。6は底部の切り離し痕が不明瞭である。体部から底部への変換点が他の類と異なっている。色調はすべて黄茶色を呈す。胎土は水簸した粘土を使用しており極めて精良。焼成は良好である。8は坏でロクロ水挽きにより成形・調整。底部・体部に成形の際の凹凸を見せる。端部は丸くおさめる。底部は回転糸切りにより切り離している。ロクロの回転は時計回わりである。2の口縁部には燈明として利用した際の油芯の痕があり，これらの土器が葬儀用具として



第28図　3号円形土壙墓実測図(1/10)

使用されたのちに埋納たれたことを示唆している。中世末～近世初頭頃の所産と思われる。

●３号円形土壙墓（第28図，図版８・10）

頭蓋骨のみの発見で，土壙の検出は精査したにも拘らずなされなかった。本来存在したであろうと思われるため土壙墓の名称を付して紹介した。

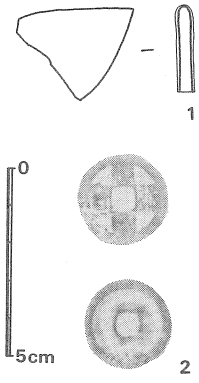
これらの円形土壙墓は，２号出土土師質土器から見て，中世末～近世初頭の所産と思われる。

番号	器 種	口縁外径	器 高	底 径
1	小皿	6.6	1.5	3.5
2	〃	6.5	1.6	4.0
3	〃	6.2	1.4	3.8
4	〃	6.1	1.4	4.0
5	〃	6.5	1.5	4.4
6	〃	6.5×6.2	1.8	4.4
7	〃	6.9×6.7	1.8	4.4
8	坏	10.9×10.4	2.8	5.8

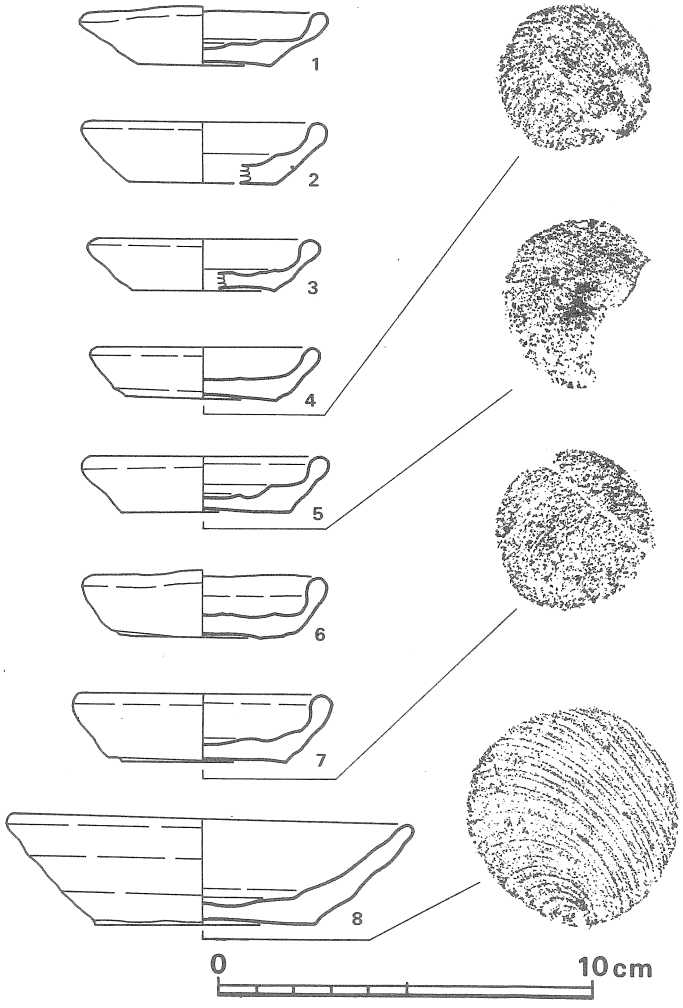
第３表　土師質土器法量表（cm）

３　その他の遺物（第30図，図版10）

表層より出土した２点を挙げた。１は淡緑色を呈する青磁碗片で明代のものか。２は「唐国通宝」で南唐・中興二年（AD.959）の初鋳である。



第30図　その他の遺物(1/2)



第29図　２号円形土壙墓出土遺物実測図(1/2)

Ⅳ　林ノ辻遺跡出土の中世人骨

松下孝幸※
分部哲秋※※

1．はじめに

長崎県諫早市小川町にある林ノ辻遺跡の土壙墓から，3体分の人骨が出土した。この人骨は別項で述べられているように，考古学的所見より，中世に属する人骨である。

人骨の保存状態は著しく悪いもので，残存量も少なく，計測できたのは下顎骨のみであったが，全国的に中世人骨の例は偏在しており，資料としては貴重なものなので，できるだけ詳しく観察した。その結果を報告したい。

2．資料および所見

林ノ辻遺跡から出土した中世人骨は3体で，その埋葬遺構はすべて土壙墓である。出土人骨の性別・年令は下記の所見から次のように推定される。

人骨番号	性別	年令
1号円形土壙墓人骨	女性	熟年
2号円形土壙墓人骨	女性	壮年
3号円形土壙墓人骨	不明	熟年

残存していた人骨の保存状態は著しく悪く，ほとんど骨片状のものであったが，歯は比較的良く残っていた。

1号円形土壙墓人骨（女性・熟年）

歯が釘植した下顎体と遊離した上顎歯が残存していた。下顎骨は両側の下顎枝を全く欠いているが，下顎体は完全である。諸径は表4に示すとおり，あまり大きいものではない。

歯は良く残存しており，これらを歯式で示すと次のとおりである。

／ ／ ／ ／ P_1 C ／ ／	／ ／ C ／ ／ ／ ／ ／
／ ⊗ ⊗ P_2 P_1 ○ ○ ○	○ I_2 C P_1 P_2 M_1 ⊗ ⊗

（／：不明（破損）
○：歯槽開存
⊗：歯槽閉鎖
以下同じ）

※　MATSUSHITA　Takayuki　長崎大学医学部解剖学第二教室
※※　WAKEBE　Tetsuaki　〃

表4	下顎骨計測値（mm）	
67.	前下顎幅	42
69.	オトガイ高	—
69(1).	下顎体高(右)	27
	(左)	29
69(3).	下顎体厚(右)	12
	(左)	11
69(3)／69(1).	下顎体高厚示数(右)	44.44
	(左)	37.93

咬耗度はＢrocaの２度である。

下顎骨の他には順位不明の肋骨の肋骨角の部分が残存していただけである。

性別は下顎骨の径がやや小さいことから，女性の可能性が強く，年令は歯の咬耗度から，熟年の初めと推定される。

２号円形土壙墓人骨（女性・壮年）

歯のみが残存していたが，すべて遊離歯で，しかも歯冠のみである。これらを歯式で示すと次のとおりである。

／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ C ／ ／ ／ ／ ／
M_3 ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ P_2 M_2 M_2 ／

咬耗度はＢrocaの１度であり，歯の大きさは一様に小さい。

性別は歯の径が一様に小さいことから判断すれば女性と考えられ，年令は歯の咬耗が軽いことから，壮年と推定される。

３号円形土壙墓人骨（性別不明・熟年）

頭蓋の一部と歯のみが残存していた。頭蓋は左側頭骨の乳様突起の一部と外耳孔の一部および下顎体の一部が残存していたにすぎない。下顎骨は下顎体の右側の歯槽部が部分的に残っており，この部分には歯も釘植していた。また上顎歯も遊離歯となって残存しており，これらを歯式で示すと次のとおりである。

／ ／ ／ $\dot{P}_2$ $\dot{P}_1$ $\dot{C}$ $\dot{I}_2$ ／	$\dot{I}_1$ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／
／ M_2 M_1 P_2 P_1 $\dot{C}$ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ $\dot{M}_1$ ／ $\dot{M}_3$

（•：遊離歯）

咬耗度はやや強く，Ｂrocaの２～３度である。

性別は不明であるが，年令は歯の咬耗がやや強いことから，熟年と推定される。

3．総　　括

諫早市にある林ノ辻遺跡から中世人骨が3体出土した。保存状態は悪いものであったが，できるだけ詳しく観察した。その結果は次のように要約できる。

1．3体の人骨のうち，性別を判断できたのは2体（1・2号円形土壙墓人骨）のみで，この2体はともに女性で，残りの1体は性別不明である。

2．3体とも歯が残存していたので，歯の咬耗状態から年令を推定することが可能で，1体は壮年，残りの2体は熟年と推定される。

3．鈴木（1956）は鎌倉の材木座の中世人骨を調査研究し，この人骨には長頭，低顔，低鼻，歯槽性突顎が認められることを明らかにし，中世人が現代人と著しく異なっていたことを指摘した。九州では内藤によって，熊本県の尾窪（1973），大分県の立石（1974）などの遺跡から出土した中世人骨にも同様の傾向が認められることが明らかにされた。その他保存状態は悪いものであるが，熊本県塚原（内藤，1975），同県興善寺馬場（松下，1980），荒尾市杉谷（内藤・松下，1978）などの遺跡からも中世人骨が出土しているが，その例数はまだ少なく，本例も保存状態は悪いもので，上記のような特徴が認められるかどうかを明らかにすることはできなかった。

　九州・山口地域においても中世人骨の例はしだいに増加してきているが，その出土例は地域的に偏在しており，また数も少なく，中世における地方差の問題など明らかにすべき課題は多い。今後とも中世あるいは近世人骨の例を1例でも増やし，歴史時代人の形質の解明に努力していきたい。

〈擱筆するにあたり，本研究の機会を与えていただいた諫早市教育委員会社会教育課，ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に深く感謝致します。〉

参考文献

1．北條暉幸・青木紀保，1969：熊本県荒尾市境崎貝塚出土の人骨について。解剖誌，44（付1）：2－3。

2．池田次郎，1980：帝釈寄倉岩陰遺跡出土の中世人骨について。広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報Ⅲ：99－105。

3．故松野茂・北條暉幸・松田愛人・土生健次郎，1970：熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について。熊本医学会雑誌，44：999－1016。

4．松下孝幸，1980：熊本県興善寺馬場遺跡出土の中世人骨。興善寺Ⅰ（熊本県文化財調査報告第45集）：145－159。

5．松下孝幸，1980：茶屋原遺跡出土の中世人骨。茶屋原遺跡（北九州市文化財調査報告書第37集）：58－61。

6．松下孝幸，1980：霊仙寺出土の中世人骨。霊仙寺跡（東脊振村文化財調査報告書第4集）：108－113。

7．岩本岩太郎，1981：歴史時代人骨。人類誌，89：198－199。

8．岩本岩太郎，1981：歴史時代人骨。季刊人類学，12 (1)：7 －18。

9．永井昌文，1965：荒尾市浄業寺中世人骨について。浄業寺と小代氏（荒尾市文化財報告第１集）：51－53。

10．内藤芳篤，1973：人骨。尾窪（熊本県文化財調査報告第12集）：62－78。

11．内藤芳篤，1974：人骨。立石貝塚（大分県文化財調査報告第31集）：39－45。

12．内藤芳篤，1975：塚原中世墳墓・丸尾５号墳出土の人骨について。
塚原（熊本県文化財調査報告第16集）：317－322。

13．内藤芳篤・松下孝幸：杉谷遺跡出土の中世人骨。
大園山・杉谷遺跡（熊本県荒尾市文化財調査報告第３集）：116－122。

14．内藤芳篤・松下孝幸・分部哲秋・田代知則，1979：九州の中世人骨について。人類誌，87：171。

15．鈴木　尚，他，1956：頭骨の形質。「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨。：75－148。岩波書店，東京。

16．牛島陽一・仙波輝彦，1960：山口県阿武郡見島村出土の中世時代の人骨について。人類学研究，７：52－56。

Ⅴ まとめ

Ⅳにおいて本遺跡から検出された遺構及び遺物について概略を記したが，本章でそのまとめを若干行いたい。既述部分と一部重複することもあろうがご寛怒願いたい。

1 甕棺墓について

今回検出された甕棺墓は一基のみであったが，先年の分を含め三基を数えることとなった。今回のものは，日常土器を転用した小児棺で，木蓋で密封し塊石で押える方法をとっている。このような例は，二塚山遺跡第43号甕棺墓[註1]に認めることができるが，墓壙底に木蓋を固定する溝を有しない点異なっている。使用された甕は，従来黒髪式[註2]と言われる黒髪町遺跡出土の甕棺に類似する。底部は欠失していて不明であるが，恐らく脚台が付くものと思われる。佐藤伸二氏らは『矢護川日向遺跡』[註3]の中で，住居址出土弥生中期土器をA～D類に分類され，種々検討の結果，大要中期中葉頃に位置付けられようとの結論を下された。また武末純一氏[註4]は上記A～D類の中，D類について言及され「……D類とされた甕は他の土器よりも一段階遅れると考えられる。黒髪式土器をⅠ類（中期）Ⅱ類（後期初頭）に分離するならば，D類は黒髪Ⅱ式に入る可能性が強い。」とされている。D類の甕は口縁部が「く」の字状に外反するもので，内側に突出する張り出しを持たない部類で明らかに後出の傾向を示している。

本遺跡出土の甕は，その特徴において前記D類より前出するものであり中期後半～終末頃に位置づけられよう。細部の特徴においてやゝ異なるが類例として富の原常盤遺跡[註4]3号甕棺を挙げることができよう。

以上により本遺跡における甕棺墓は，昭和55年度発見分の中期中頃から後半終末頃まで存続するようである。また第5図7の甕は前期後半頃まで遡るものではないかと思われるが，該期の甕棺は壺が大形化した器形をとることから甕棺として利用されたものとは考えられず，木棺墓，土壙墓，石棺墓等の存在を思わせる。墓域の形成過程と併せて今後追求されるべき課題であると言えよう。

2 祭祀遺構について

遺跡の東崖面において確認されたもので，大土壙底に小土壙を穿つ規模の大きいものである。中期前半から中頃にかけての所産かと推されるが，遺構の性格上放置状態にあったためであろうか中期全範の土器を含んでいる。既述した如く墳墓に伴う祭祀遺構と考えられるが，時期的に甕棺墓と対応するものであろう。しかし，今回発見の甕棺墓とは懸隔があり，近傍に対象遺構が存在するものと考えられる。土器は壺・甕・高坏などがあるが悉く小片と化しており，復元可能な例は1点もない。土器を破砕することによってその機能を消失させることを必要とした証拠である。この他，着目される遺物に小形の手捏ね土器がある。森貞次郎博士[註5]はこれら手捏ね土器の出現時期，出土地点の分析を通して「……(1)住居地域に密着していることの意味，

(2)農耕祭祀には関係はないのかということ，(3)埋葬遺跡における二次的祭祀についてどんなことが考えられるか……」との提起をされ，各々の意義について明確に言及されている。(3)について「小形粗製手捏土器は，がんらい自然神を対象とする鎮魂の祭祀の用具であり，その小形粗製手捏の手法は自然神に対応する呪術的な祭具とみることができよう。……弥生後期の埋葬地における二次的祭祀は何らかの理由にもとづく，その地点における自然神に対する鎮魂の祭祀とみることが適当ではないだろうか。」とされ祭祀行為の背景に重要な指針を提示された。

従来，墳墓群に対する祭祀は特定の甕棺墓に対する祭祀と家族墓及び村落墓全体を対象とする共同祭祀の存在が指摘[註6]されているが，石橋新次氏[註7]は二塚山遺跡の分析により「祭祀遺構１基に対し最大６～10基，１回の祭祀行為につき２～４基」と墳墓数を想定され「現在のところ祭祀遺構に全墳墓域を対象とするものや，特定個人墓を対象とするものは見い出し得ない。」とされている。

本遺跡の場合，祭祀遺構がどれ位の墳墓群に対応するものであるか，未だ不明部分も多いがＧ－５集石遺構が祭祀的様相をもつことを勘案すればさほど多数にのぼることはなさそうである。また，他地域出土の祭祀遺構と比較すると，土壙覆土は自然堆積と推され，層中に炭化物を含み，大土壙中に小土壙を穿つ点などの類似点[註8]が見い出せるが，土器祭祀と呼ぶには余りに多数の礫で構成されている点[註9]大いに異なる所である。

３　箱式石棺墓について

３基を検出したが，各々タイプを異にしている。蓋石の覆せ方は１号が石材を並列させ，相互の石が接することはあっても，重なり合うことはなく，接した部分には粘土による目張りか，あるいは更にその上に蓋石を重ねている。この方法は殆どの箱式石棺墓において確認されるもので通有の被覆の仕方である。　これに対し，２号は石材の一端が他の石材に重なり合うように意図して被覆されている。被覆の順序は足元から頭位にかけて被覆する例と，頭位から足元にかけて被覆する例の両者がある。

側壁の構造については，使用石材の長さに規定されるが，また埋葬法の在り方によっても異なってくる。例えば，前期後半に位置付けられる五島小値賀町殿寺遺跡第１号石棺墓[註10]は工事により破壊されていたものの，墓壙底の石材据置溝の存在より推定して，内法75×60cm弱の規模とされている。化屋大島１号・２号石棺墓[註11]（前期末）が105×45cm，117×47cmほど，宇久町松原遺跡[註12]は板付Ｉ式小壺を副葬しており，同様に規模は小さい。また，中期に比される深堀遺跡[註13]の箱式石棺墓は108×56cmを測り，深さも56cmと深い。この石棺墓では追葬が認められており，葬位は仰臥屈葬であった。これは従来から指摘[註14]されているように縄文晩期に出現する支石墓の下部構造との類縁性が認められよう。葬位は大略仰臥屈葬位である。以上のように既して古期において棺身が短くて深いものが見られるようである。

後期から古墳時代にかけては，伸展葬が定着し棺身が長くなるために使用側壁数も増し，また蓋石も同様の傾向をとる。屈肢葬から伸展葬への葬位の変化が，棺身の長短に起因した結果

であろう。

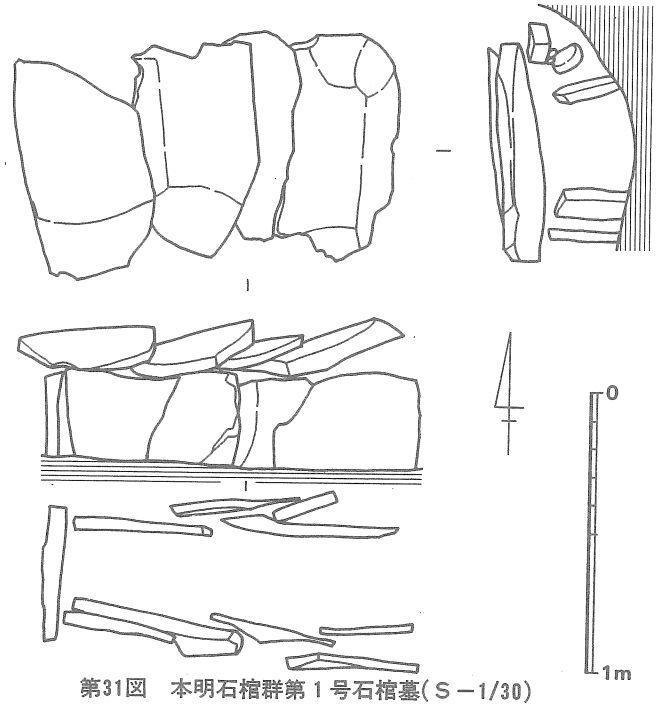
内部施設には，礫床，石枕等があるが時期的な特徴は指摘し得ないようである。時期が降るに従い整備される傾向にあるようだ。

さて，本遺跡の箱式石棺墓は，蓋石被覆の方法，棺床施設において相違点が認められるものの，築造時期は相近接したものと思われる。

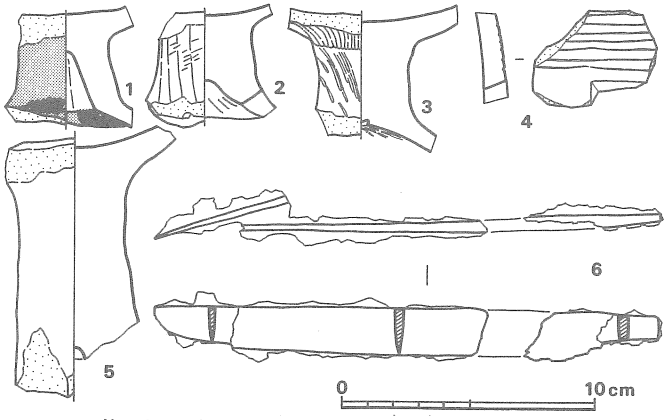
第31図は，本市本明町に所在する本明石棺群[註15]中の第１号石棺墓である。蓋石は石材の一端が重なり合う方法を執っており，頭位から足元にかけて被覆している。棺床面は礫を敷設するなど，その特徴は本遺跡２号石棺墓と類似する。第32図は出土遺物である。４は長方形透しを有し，クシ描き沈線をもつ器台で近年類例が増加している。１～３の低脚は高坏かと思われる。類例は平山遺跡Ｂ地点[註16]の出土資料が挙げられよう。

これらの遺物は弥生時代終末から古墳時代初頭に比定されよう。

本石棺出土の鉇は古瀬清秀氏[註17]のIa類に属すると思われ，汐井掛遺跡出土鉇[註18]と比較すると茎の形態において異なっている点，指摘されよう。よって，本箱式石棺群は古墳時代初頭頃の所産と推考される。



第31図　本明石棺群第１号石棺墓(Ｓ－1/30)



第32図　本明石棺群出土遺物実測図(Ｓ－1/3)

４　円形土壙墓について

二基が検出され，形状共に相似る。葬位は明確でない。壙中より土師質土器が出土している。当該墓及び土師質土器の出土例は本県において僅少であり，型式分類，編年作業は今後の課題と言えよう。

土器はすべて糸切り離しによっており，形態，法量等から大宰府出土ＳＸ1400新[註19]（14世紀中頃）以降の所産と考えられる。下限については今一つ明確でないが，北九州市茶屋原遺跡[註20]火葬墓出土品に類似する。この遺跡は香月氏の本貫地とされ16世紀の年代が付与されている。

また，『西郷記』[註21]には，天正15年の扇畠（陣の辻）の合戦を記し，戦死者の「首塚」を立てた記事を載せている。直近には正保三年銘の安山岩自然石墓碑がある。

このことより，大略16世紀前後の年代を付与できるのではなかろうか。今後の類例の増加を待ちたい。

註１　七田忠昭他　『二塚山』佐賀県教育委員会　昭和54年

註２　乙益重隆　「各地域の弥生式土器－南九州－」『日本考古学講座』４　河出書房　昭和30年
西健一郎　「熊本県における弥生中期甕棺編年の予察」『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』
古文化論集刊行会　昭和57年

註３　佐藤伸二他　『矢護川日向遺跡調査報告』　日向遺跡調査団　昭和55年

註４　武末純一　「北九州における弥生時代の複合口縁壺」『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』
古文化論集刊行会　昭和57年

註５　森貞次郎　「新・天手圷考」『国学院雑誌』第78巻第９号　昭和52年

註６　鏡山猛　「甕棺累考㈠－その群団と共有体－」『史淵』第53輯　昭和27年

註７　石橋新次　「佐賀県鳥栖市フケ遺跡出土の祭祀遺構」『古文化談叢』第10集　九州古文化研究会　昭和57年

註８　註７文献の第２号祭祀遺構及び註１文献の祭祀遺構は同様の堆積状況を示している。

註９　註１文献の祭祀遺構下は約５～25cm大の礫を含んでいるが、本遺跡ほど多量ではない。

註10　正林護　「殿寺遺跡」『長崎県文化財調査集報』Ⅲ　長崎県教育委員会　昭和55年

註11　井上和夫　『化屋大島遺跡』　多良見町教育委員会　昭和49年

註12　小田富士雄　「五島列島の弥生文化」『人類学考古学研究報告』第２号
長崎大学医学部解剖学第二教室　昭和45年

註13　内藤芳篤他　「深堀遺跡」『人類学考古学研究報告』第１号
長崎大学医学部解剖学第二教室　昭和42年

註14　註11に同じ

註15　正林護　『本明町石組埋葬遺構』　長崎大学医学部解剖学第二教室　昭和43年

註16　秀島貞康　『平山遺跡Ｂ地点』　諫早市教育委員会　昭和56年

註17　古瀬清秀　「古墳出土の鉋の形態的変遷とその役割」『考古論集』所収　昭和52年

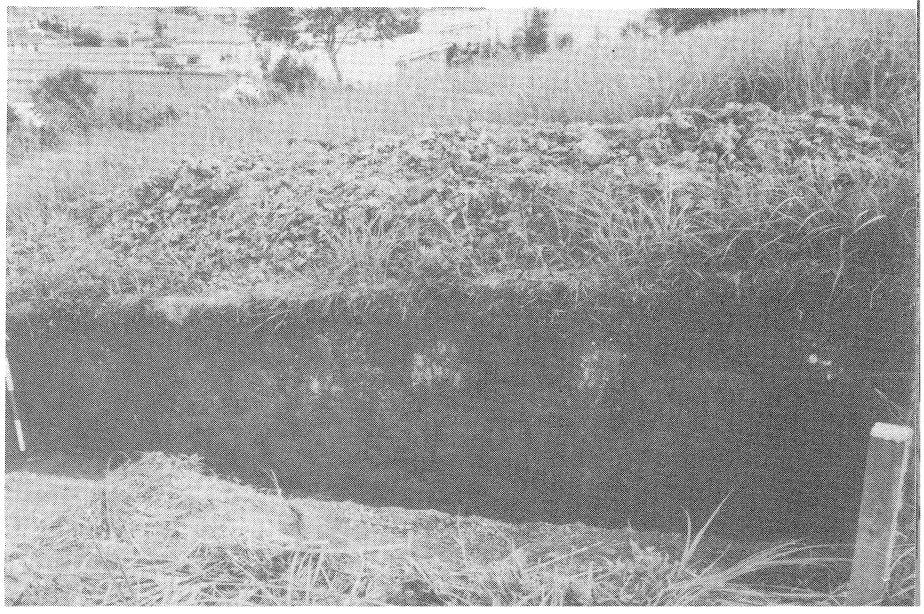
註18　池辺元明他　『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』第２集　福岡県教育委員会　昭和55年

註19　横田賢次郎・森田勉　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４
九州歴史資料館普及会　昭和53年

註20　上村佳典他　『茶屋原遺跡』　北九州教育委員会　昭和55年

註21　牟田五月男・山部淳編　『諫江史料拾録』　昭和50年

図　　版

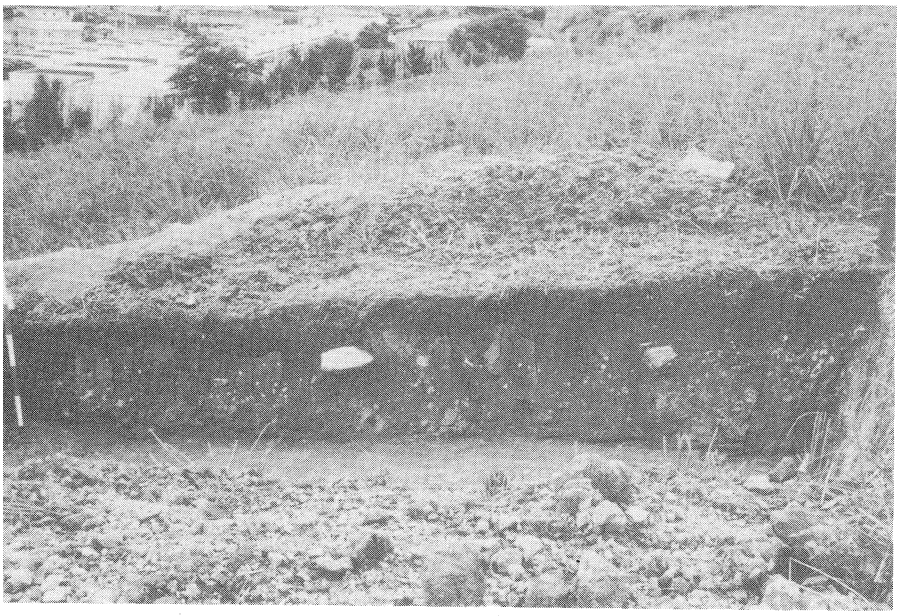


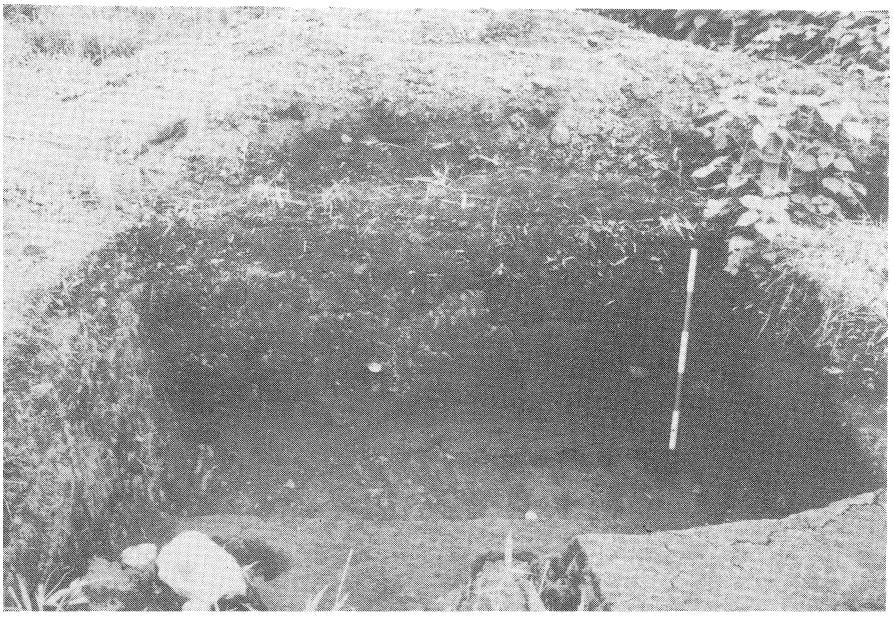
図版１

１．遺跡遠景(東より)

２．調査風景

３．Ｇ－１土層(北より)



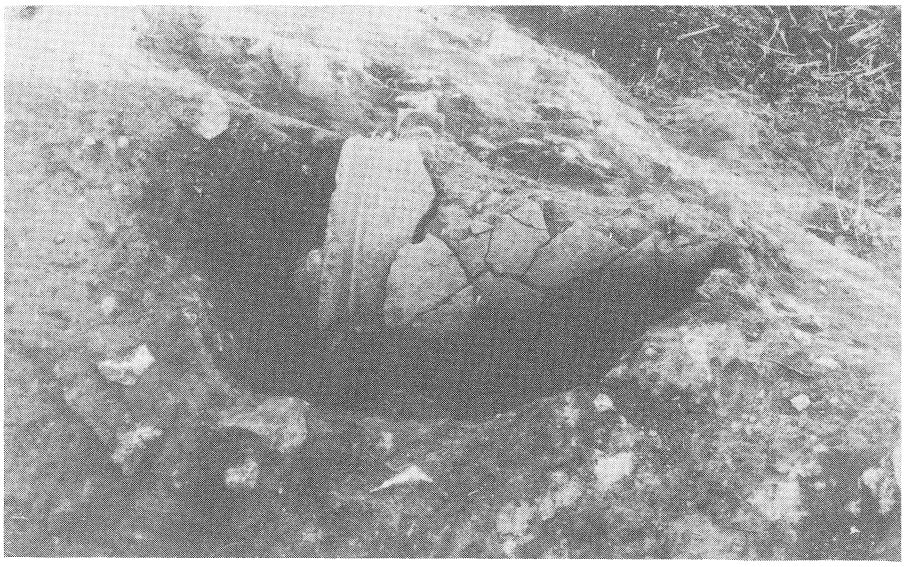


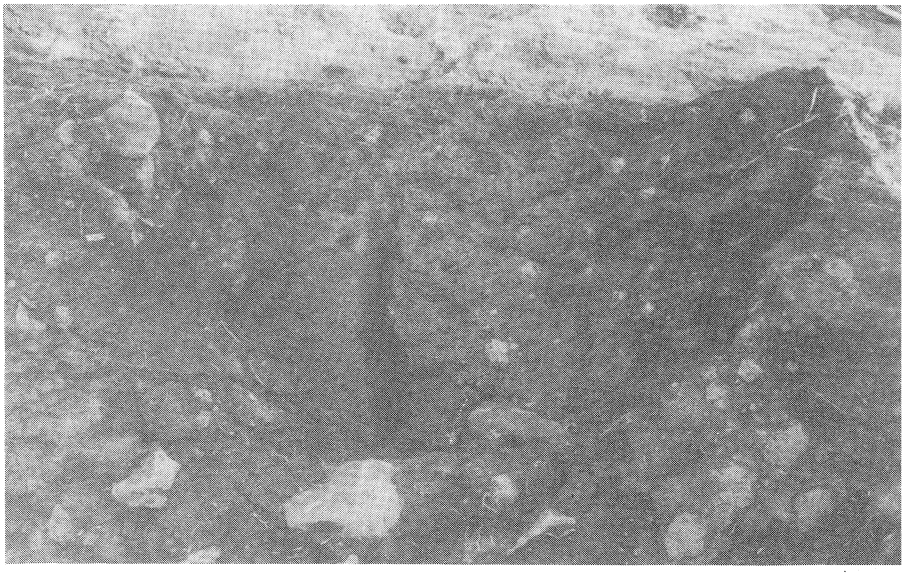
図版 2

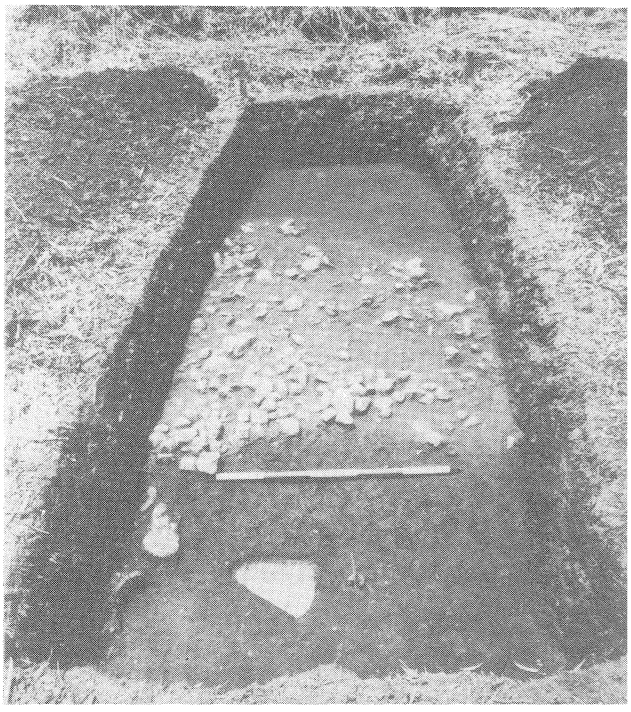
1．Ｇ－２土層（北より）

2．Ｇ－３土層（北より）

3．Ｇ－６土層（西より）





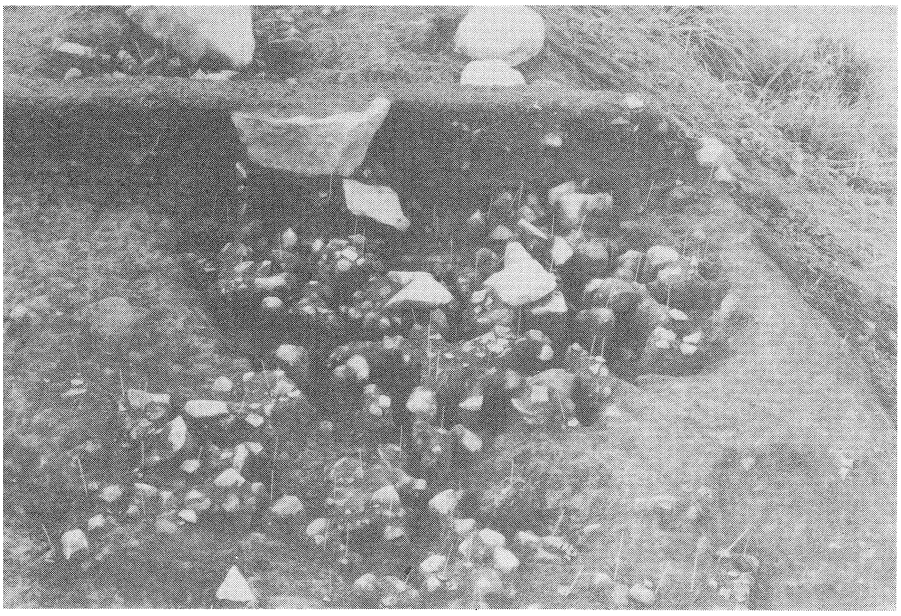


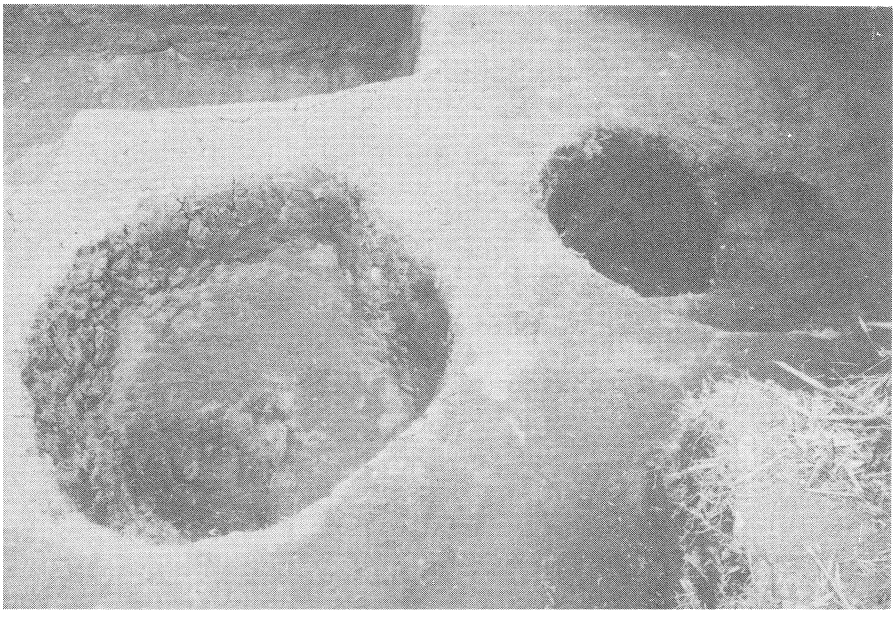
図版 3

1．甕棺墓出土状況(北より)

2．甕棺墓壙(北より)

3．集石遺構(東より)



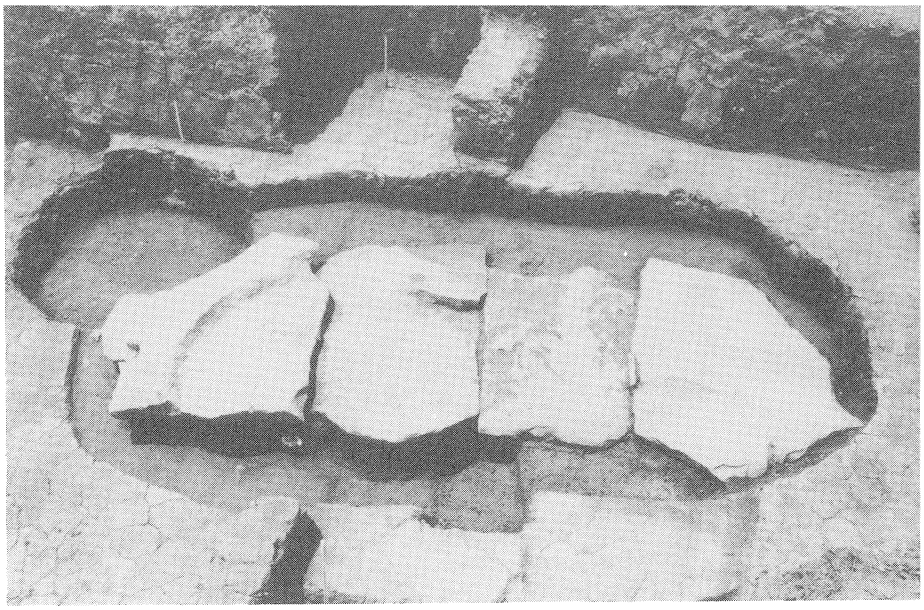


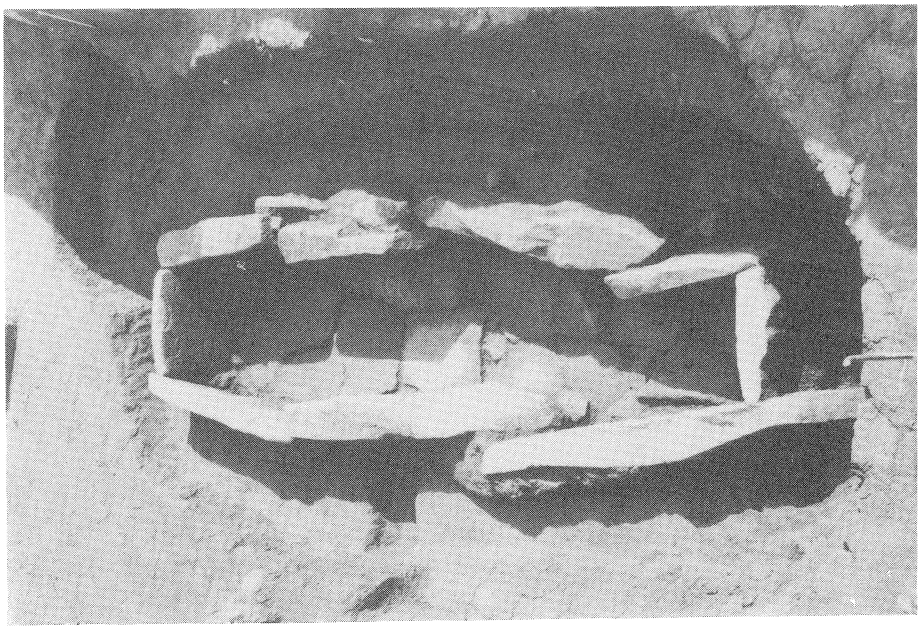
図版 4

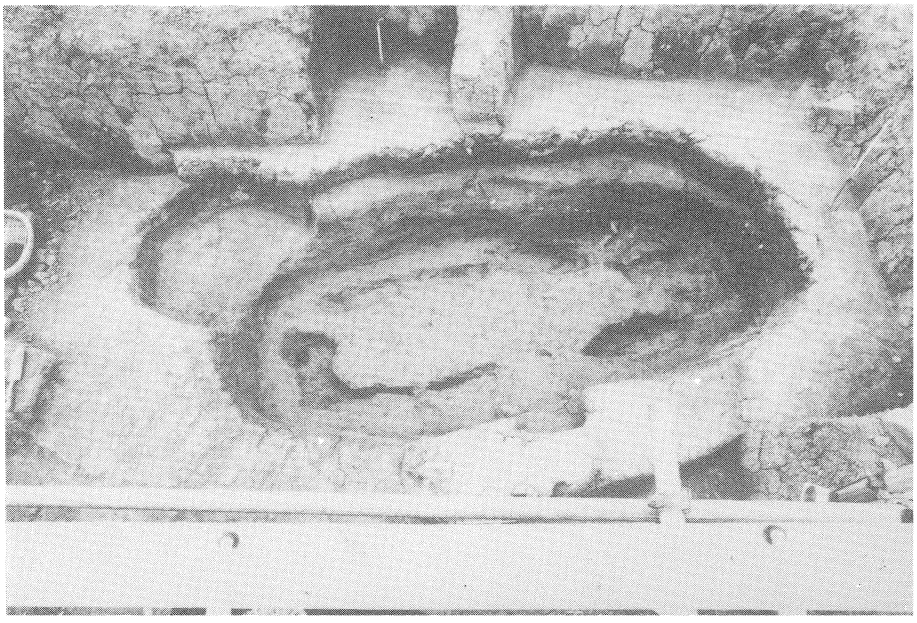
1．祭祀遺構遺物出土状況
（南より）

2．掘り上げ後の土壙の状態
（北より）

3．円形土壙（東より）





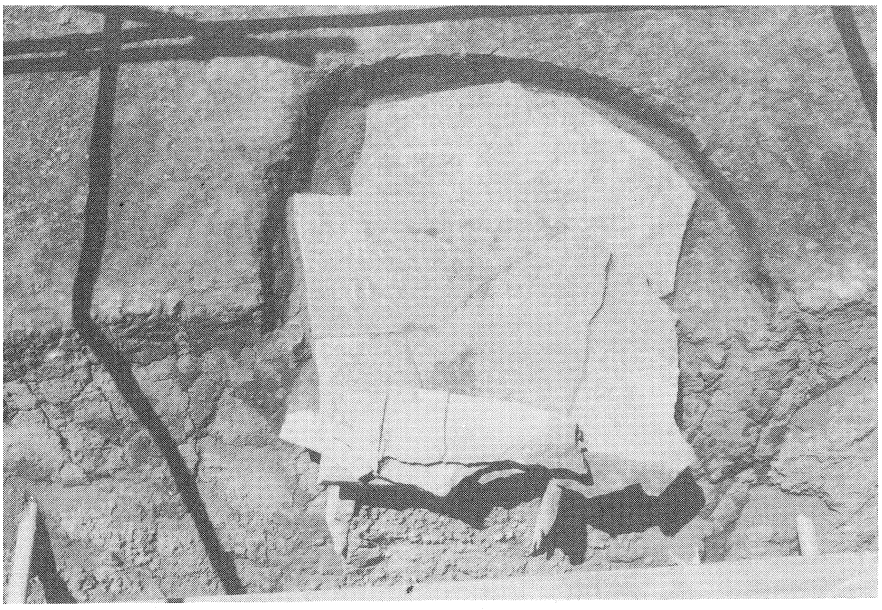


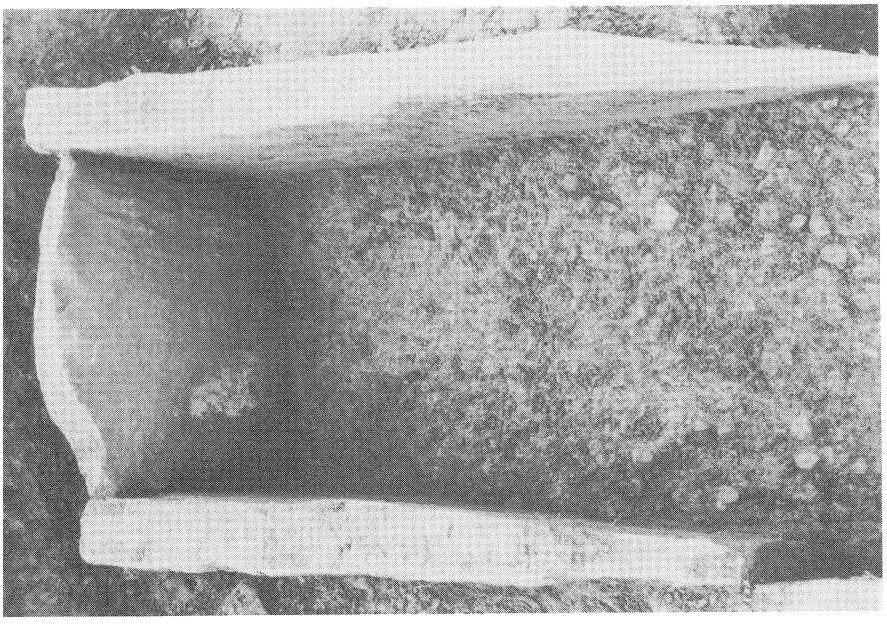
図版 5

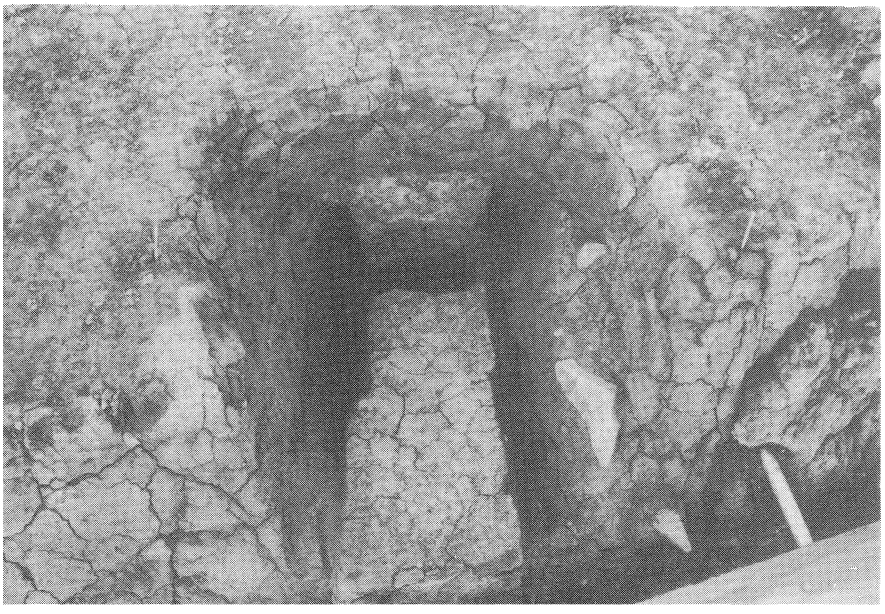
1．１号箱式石棺墓(東より)

2．蓋石除去後(北より)

3．墓壙(左上は１号円形土壙墓)(東より)







図版 6

1．2号箱式石棺墓(東より)

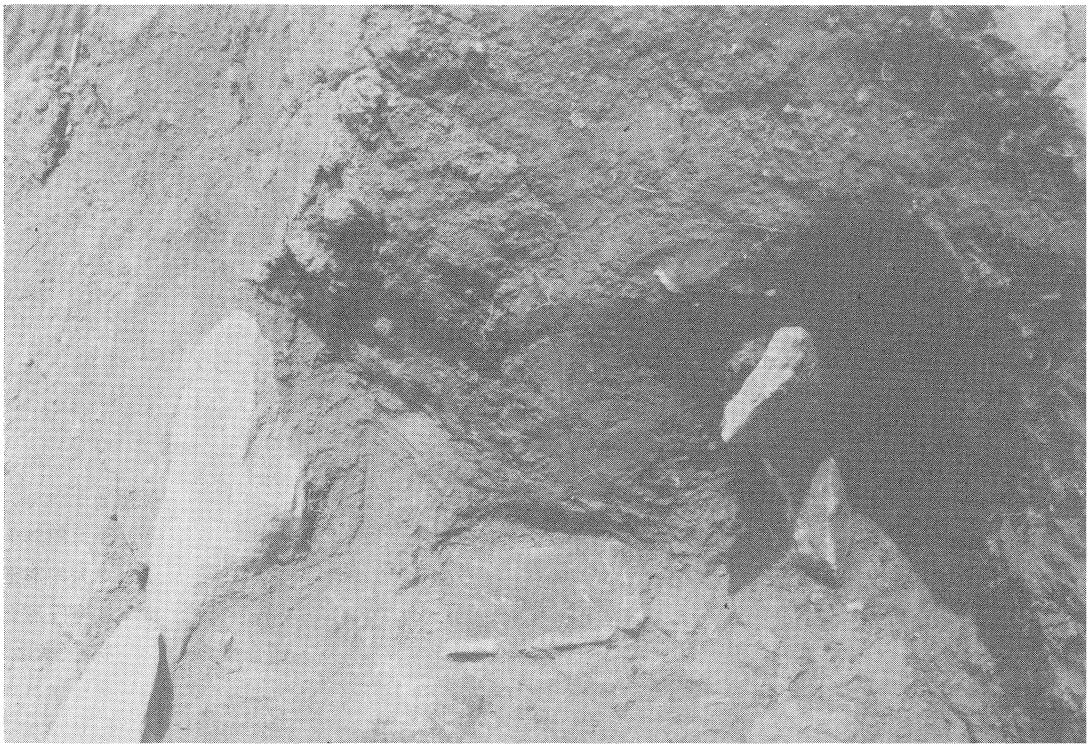
2．蓋石除去後(東より)

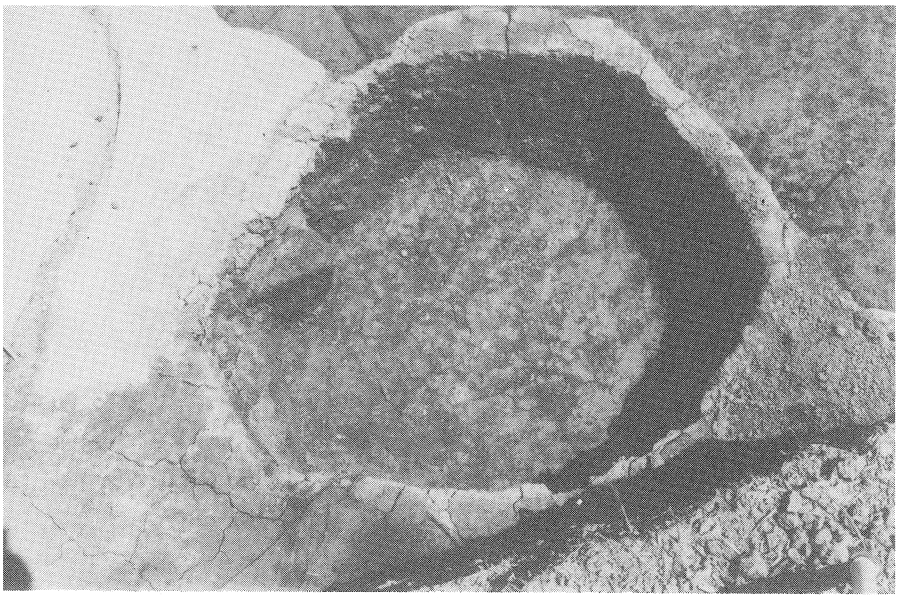
3．墓壙(東より)

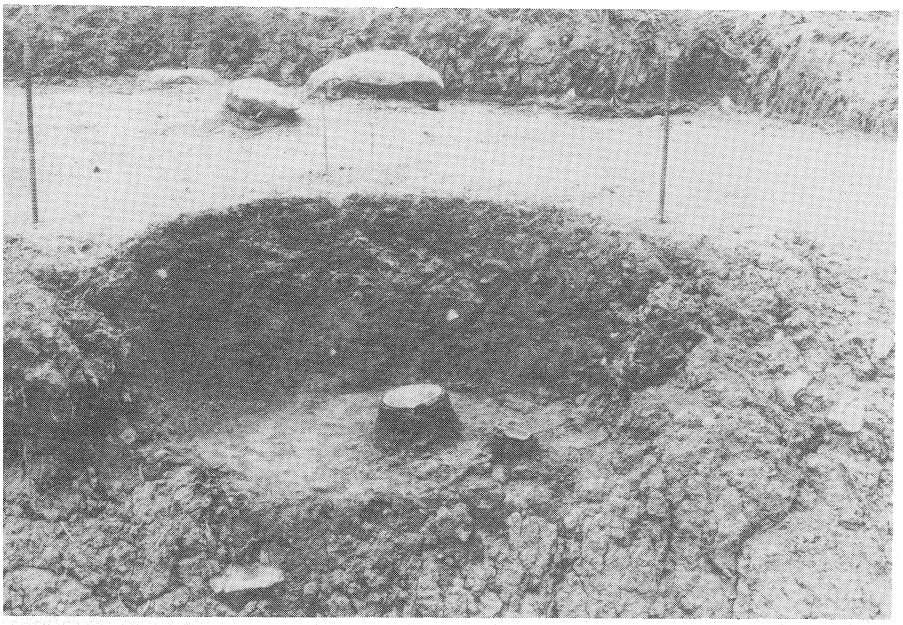
図版 7

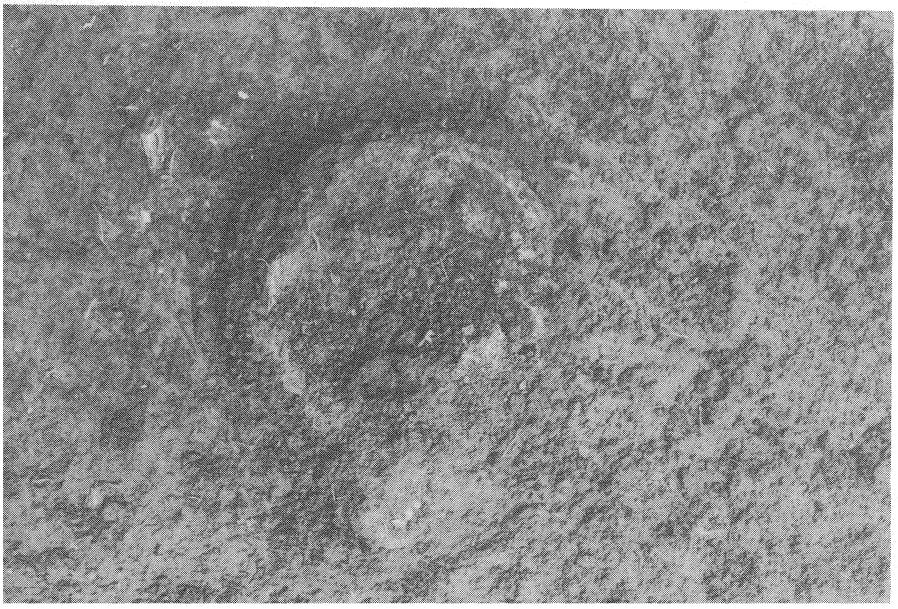
1．3号箱式石棺墓(北より)

2．小口部の状態(北より)







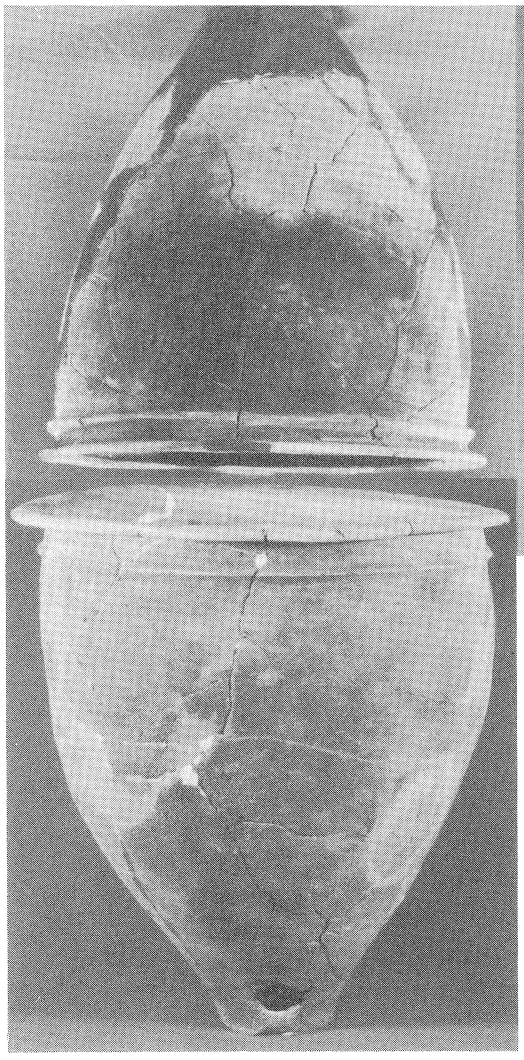


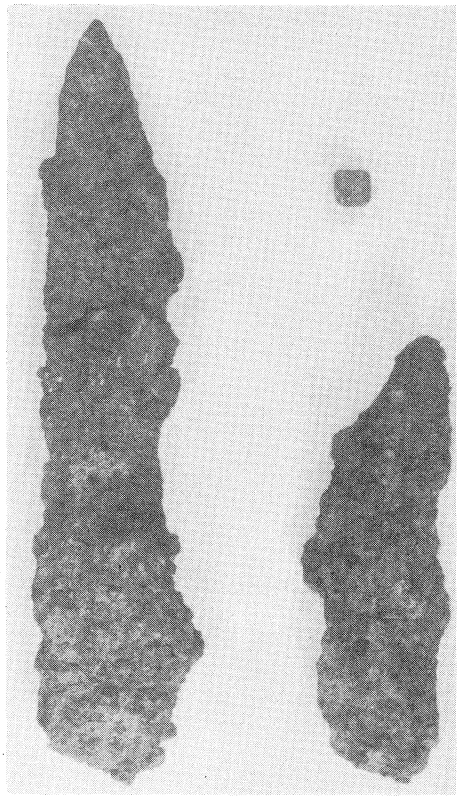
図版 8

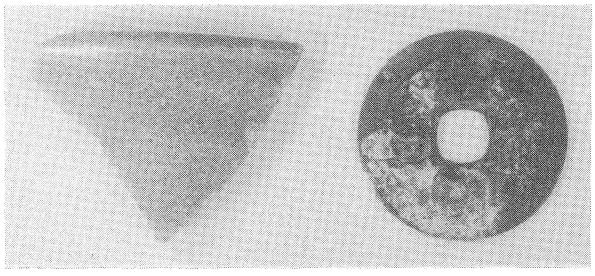
1．1号円形土壙墓(西より)

2．2号円形土壙墓(東より)

3．3号円形土壙墓頭蓋出土状態(南より)

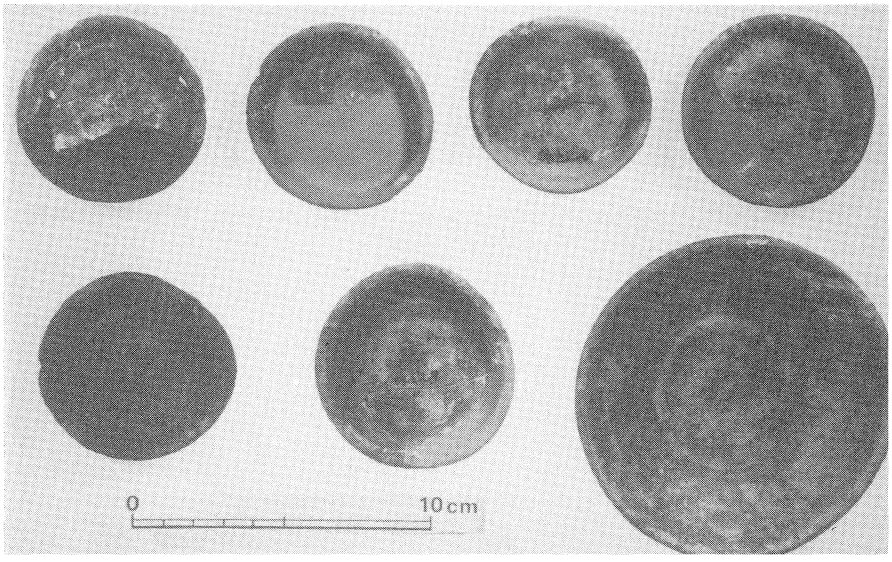


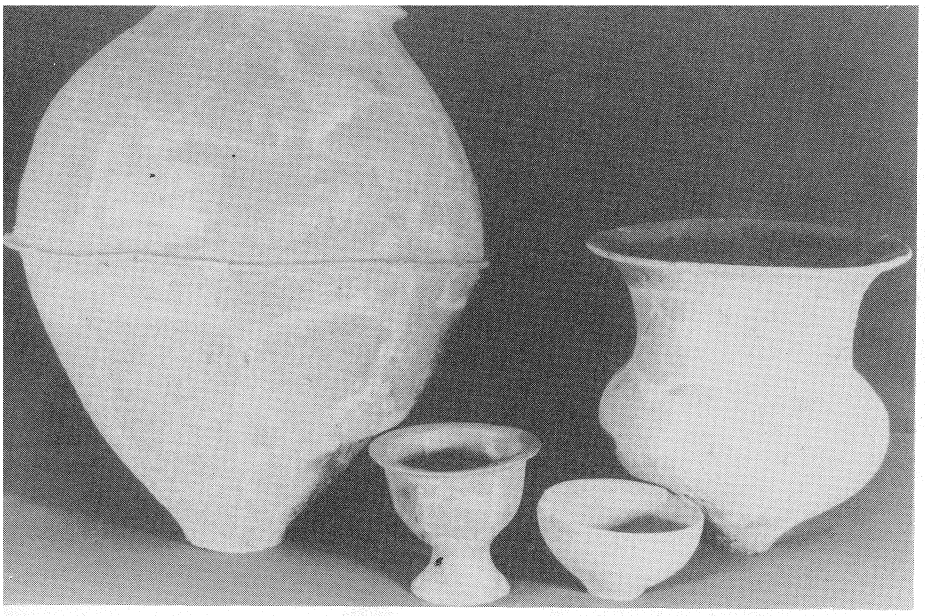


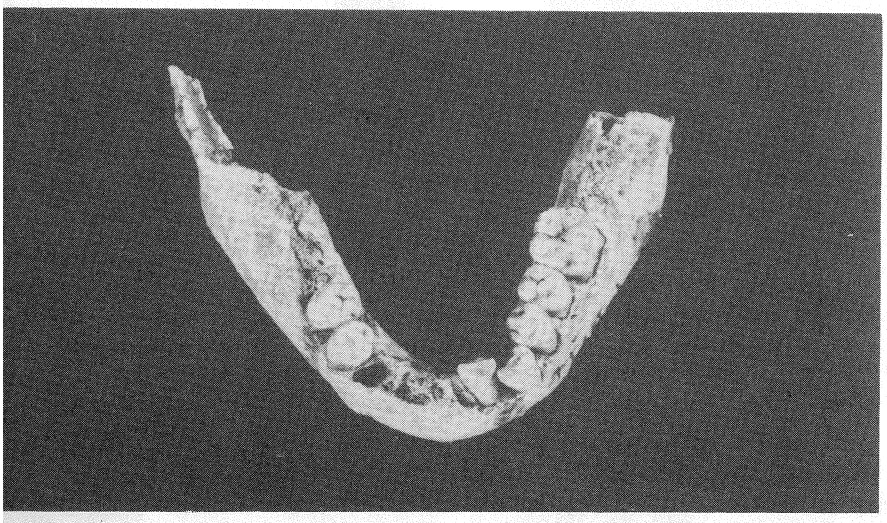


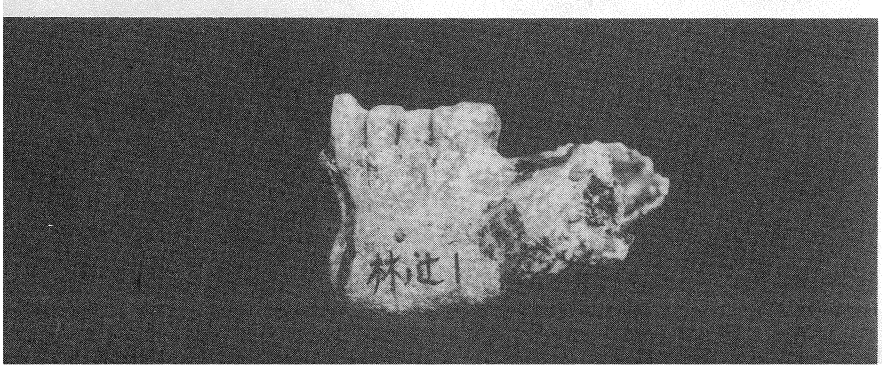
図版 9　出土遺物

S.55年度発見甕棺	甕棺
	ガラス玉（1号）
青磁・銭貨	鉄（2号）　鉇（1号）
土師質土器	









図版10

1．四時秋出土甕棺

2～4．

1号円形土壙墓人骨

諫早市文化財調査報告書第４集

林ノ辻遺跡

昭和58年３月31日

発行所　諫早市教育委員会
諫早市東小路町１番地
印刷所　諫早印刷株式会社
諫早市天満町13番22号

文化振興課

禁持出